学校法人 同志社

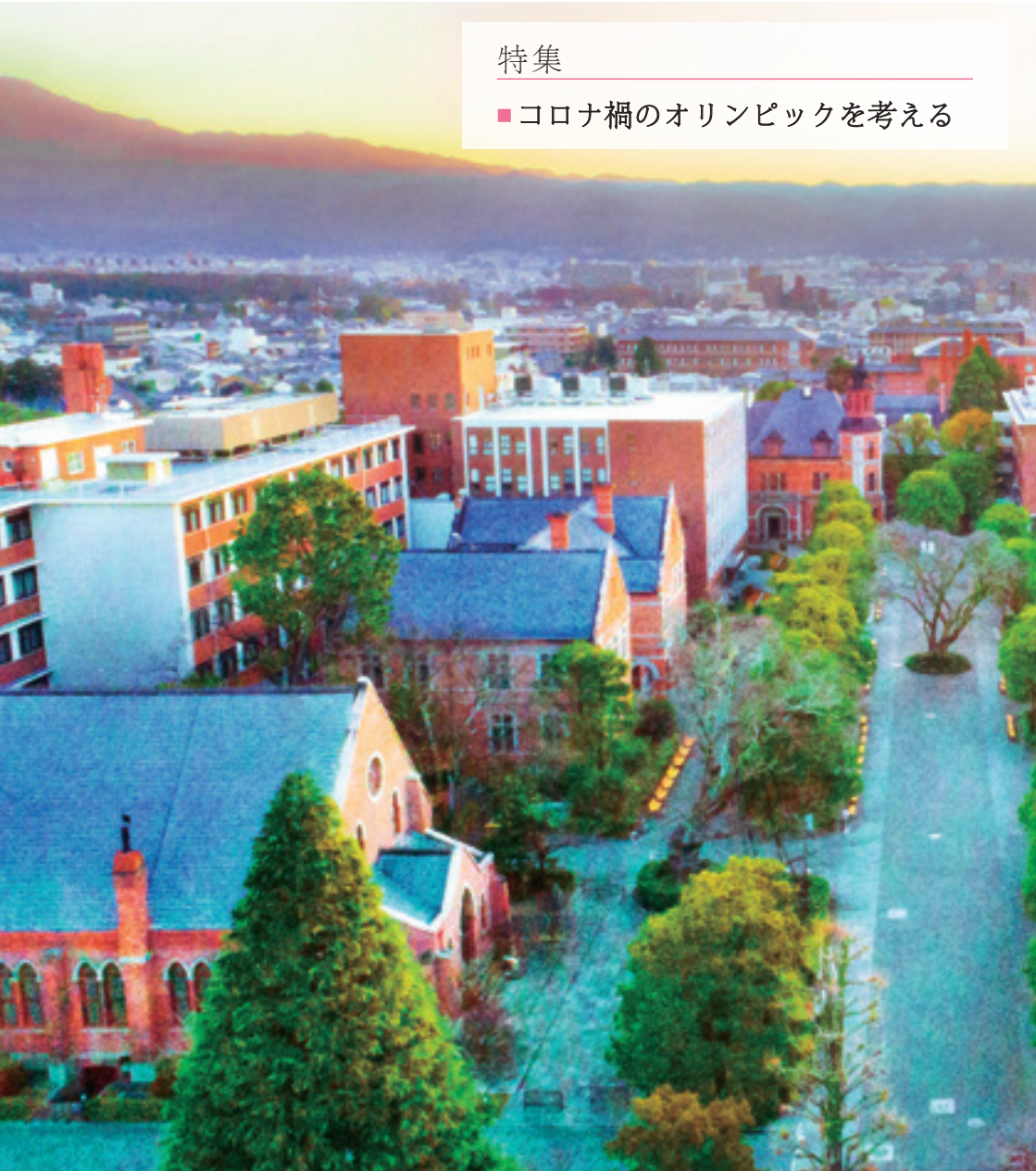
DOSHISHA JIHO

同志社時報

2021.4
No.151

特集

■コロナ禍のオリンピックを考える



■…真之自由教会ト自由教育を得セしめよ、此二件ハ車之両輪あるか如く是非トモナカラネハナラサル者と確信仕居候…

「1889年3月5日　徳富猪一郎宛て書簡」／『新島襄全集4』p67

森田　喜基（キリスト教文化センター准教授）

徳富猪一郎（蘇峰）に療養先から宛てた手紙の一節。冒頭で新島は、米国留学中から世話になった森有礼が国粋主義者に暗殺されたことを徳富に知らされ、閉塞感漂う時代を憂いている。そのような時だからこそ、真の自由教会と自由教育とを実現し、それらが両輪として前進する大学の設立を決意している。ここで言う自由とは？明徳館にラテン語で「veritas liberabit vos」とあるが、これはヨハネ福音書8章「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」というキリストの言葉であり、真理とはキリストそのものである。そしてキリストの愛、また隣人愛によって得られる自由がある。新島はアメリカでその自由を味わい、日本においてまた、その必要性を切に感じていたのだ。

さて、この手紙が書かれた時、新島夫妻は神戸に4か月間借家し、保養のために通った「神戸諏訪山和楽園」（現在の兵庫県庁北方）を、郵便物の宛先として手紙を受け取っていたと考えられる。「これでは保養にならないのではないかと、あきれた」と和楽園の主人に言わせたほど、大学設立のため病を押して精力的に手紙を書いていた。同志社の礎は、この新島の信仰によって創られた。混迷の時代に生きる今だからこそ、改めてこの両輪を揃え、整えて、新島の軌跡を辿りつつ、同志社という車を、共に未来へ進めるものでありたい。

法　人

『同志社創立記念日祈祷会』

2020年11月29日

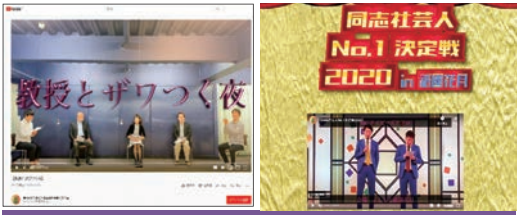
同志社創立記念日祈祷会が、11月29日(日)午前9時から、栄光館ファウラーチャペルにおいて執り行われた。今年度は若王子山頂にある同志社墓地から開催場所を移し、かつ、人数制限を設けての開催となったため、165名(内オンライン参加者88名)の園児・児童・生徒・学生・教職員・卒業生・保護者等の参加となった。

大　学

『2020年度同志社クローバー祭、第145回同志社EVEオンライン開催』

2020年度同志社クローバー祭、第145回同志社EVEは新型コロナウイルス感染症の影響で、オンラインでの開催となった。初めての試みであったが、学生スタッフのアイデアが結集されたイベントとなった。

2020年度同志社クローバー祭の様子



第145回同志社EVEの様子

女子大学

『新型コロナウイルス感染防止対策「Be Handsomeキャンペーン」』

新型コロナウイルスを乗り切るために、新島襄が妻八重を美しい行いをする人として評した手紙より引用した、「Be Handsome」キャンペーンを実施。感染防止対策の励行は、キリスト教主義に基づいた他者への思いやりの気持ちに基づくもので、美しい行いができる女性(ハンサムウーマン)になってほしいという思いを込めています。学生製作のポスター掲示、動画公開に加え、全学生に感染防止に関するマナー冊子、オリジナル消毒ジェル、ウエットティッシュを配布して啓発を行った。

（参考）
彼女は決して美人ではありません。しかし、私が彼女について知っているのは、美しい行いをする人（ハンサムウーマン）だということです。
私にはそれで十分です。

（新島襄からハーディー宛の手紙
1875年（明治8年）11月23日）

中学校・高等学校

『高校「岩倉祭」・中学「オンライン学園祭」』

高校　2020年10月2日～5日
中学　2020年11月24日～27日

輝いてこそ青春！　二度とない中・高生活を、コロナで灰色に塗りつぶされる事はありません！　コロナ感染症対策を充分配慮しつつ、生徒達のアイデアを駆使し、オンラインによる様々な行事を実施しました。

（高校）3年生によるダンスパフォーマンス「18祭」

（中学）29年目の風間浦中学との交流は、オンラインで実施

（中学）オンライン学園祭（D'fes）：同中PICTURES
（全校生から集めた写真で一枚のモザイク写真を作成）

（中学）オンライン学園祭（D'fes）：中庭にオブジェ設置

香里中学校・高等学校

『2020クリスマスツリー点灯式』

2020年11月10日

2020年11月10日（火）17時より中庭が工事中の為、食堂前に場所を移して点灯式を行いました。帰宅前やクラブ帰りの生徒達が見守る中、聖歌隊によるクリスマス賛美を行いツリーに明りを灯しました。

女子中学校・高等学校

『学園祭』

2020年10月１日

今年の学園祭は新型コロナウイルス感染症の影響により、10月1日（木）の一日実施となりました。「Stay Happy」を学園祭テーマとして、密を避けるために、ホームルーム教室へ動画配信やライブ配信の形で行いました。数々の映像作品や体育祭、人生ゲームなど、例年とは違う企画を、生徒会を中心に一から作り上げ、皆で楽しみました。また、合わせて、この一週間を文化週間として、アトリウム他で、作品や調べ学習などの発表の機会を持ちました。

国際中学校・高等学校

『高校生体育大会』

2020年10月21日

9月開催予定の体育祭がコロナ禍で中止になった代替として、10月にクラス別対抗のゴールドッチ大会を高校生体育大会として開催をした。

『中高文化祭』

2020年９月26日

コロナ禍で、例年どおりの文化祭が開催できない中、各クラスで企画・協力して作成したビデオ映像を新島記念講堂で上映発表した。

小学校

『「みちくさできょうりょく」を開催しました』

2020年11月７日

新型コロナウイルス感染症予防の観点から中止となったスポーツフェスティバルに代わり、新しい行事「みちくさできょうりょく」を開催しました。６年生がリーダーシップを発揮して、各学年に分かれて取り組んだ競技を繋ぎ、各教室に配信した映像・音声で学校全体が大いに盛り上がりました。

国際学院

初等部：『新川諒氏を迎えて』

2020年10月13日

3年生は、秋学期の後半を使って『アイデンティティー』をテーマに探究学習を進めています。この日は、ワシントン・ウィザーズでデジタルメディアスペシャリストとしてご活躍の新川諒氏をゲストスピーカーとして迎えました。Zoomの画面を通じて、アメリカの大リーグで通訳をされていたお話を交えながら、仕事を通じた出会いや国際中高時代の経験など、子ども達の励みになるお話をたくさんいただきました。

国際部：『KYOTO GRAPHIE School Competition 2020』

2020年10月16日

The DISK art students from grades 8 to 10 took part in the 2020 Kyotographie Kids Photo Competition, which is a component of KYOTOGRAPHIE Kyoto International Photo Festival, Out of 359 student entrants from the Kansai area, 39 finalists were chosen. DISK is proud that two of our students were finalists. We are even prouder to share the news that Ayase Yamagishi, with her photo entitled Pandemic Street, won overall first place.
Our congratulations go out to all the young, talented photographers.

The 1st Prize winner: Ayase Yamagishi

The 2 finalists: Ayase Yamagishi and Seokyung Kim

幼稚園

『運動会』

9月29日（火）、30日（水）、10月1日（木）の3日間、運動会を幼稚園ホールにて実施しました。密を防ぐため、保護者は園児につき1名までとし、学年ごとに観覧日を分けての開催でした。毎日違うお客さんに応援してもらいながら新鮮な気持ちで3日間園児たちは力を出し切ることが出来ました。感染対策を万全にするため制限が多い中での実施となりましたが、子どもたちの積み重ねや頑張りを発揮する機会をもつことができました。

『収穫感謝祭』

11月13日（金）に収穫感謝祭の礼拝をしました。子どもたちが各家庭から野菜や果物を持ち寄り、各々がホールに捧げました。その後ホールに集い、野菜や果物を前に聖話を聞き、神様が私たちを守り、豊かな恵みを与えてくださったことに感謝の気持ちを込めてお祈りを園児たち全員で捧げました。社会的距離を取りながらでしたが、久々に全園児がホールに集まり心を一つにして礼拝をする貴重な機会を持つことができました。

インタビューの2人

INTERVIEW

私の志

（本文4〜7頁）

濱田隼平さん

1988年兵庫県生まれ。2011年、同志社大学社会学部教育文化学科卒業。同年、山口朝日放送に入社し報道部に在籍、アナウンサー、記者、ディレクター、カメラなど多岐にわたる業務を経験。2013年、中京テレビ放送株式会社に入社し編成局アナウンス部に配属。現在は主に夕方報道番組「キャッチ！」でキャスター、リポーターなどを担当する他、スポーツの実況中継も得意とする。大学時代は体育会硬式野球部に所属。

言葉は人を笑顔にするけど傷つけることもあることを、キャスター全員が心に留めて報道しています。だから人を「いじる」時は、愛のあるツッコミがポリシーです。

山本恵理さん

1983年兵庫県生まれ。2006年、同志社大学文学部文化学科心理学専攻卒業。2010年、大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科修士課程修了。同年、カナダへ留学。2012年、アルバータ州立大学大学院体育学部アダプテッドフィジカルアクティビティ専攻修士課程入学。留学中、パラ・アイスホッケーのカナダ女子代表に選出。2015年より公益財団法人日本財団パラリンピックサポートセンター職員。2016年よりパラ・パワーリフティングを開始。2017年、FAZZAワールドカップドバイ大会にて女子55kg級6位。2019年、全日本選手権女子55kg級1位。同年、東京2020大会テストイベントにて日本記録を更新（63kg）し、女子55kg級1位。

パラ・パワーリフティングに打ち込みながら、共生社会実現に向けて活動中。コンテンツ作成と講師を務める「あすチャレ！Academy」ではオンラインセミナーも始めました。これからも笑顔で伝え続けていきます。

同志社時報

No. 151

2021.4

目　次

〈表　紙〉
今出川の夜明け
鎌田伸一（同志社中学校・高等学校事務長）
辻英俊（上原フォートスタジオ）
〈表紙裏〉
新島　襄の言葉
森田喜基
（キリスト教文化センター准教授）
〈口　絵〉
■法人　『同志社創立記念日祈祷会』
■大学　『2020年度同志社クローバー祭、第145回同志社EVEオンライン開催』
■女子大学　『新型コロナウイルス感染防止対策「Be Handsomeキャンペーン」』
■中学校・高等学校　『高校「岩倉祭」・中学「オンライン学園祭」』
■香里中学校・高等学校　『2020クリスマスツリー点灯式』
■女子中学校・高等学校　『学園祭』
■国際中学校・高等学校　『高校生体育大会』／『中高文化祭』
■小学校　『「みちくさできょうりょく」を開催しました』
■国際学院　初等部：『新川諒氏を迎えて』／国際部：『KYOTO GRAPHIE School Competition 2020』
■幼稚園　『運動会』／『収穫感謝祭』
「私の志」インタビューの2人

私の志　INTERVIEW
アナウンサーは天職　濱田隼平さん
言葉で人を幸せにして人生の選択肢を増やしてもらいたい　4
パラリンピックで日本を変える　山本恵理さん
笑顔とパラスポーツで共生社会の実現に寄与したい　6

特集
コロナ禍のオリンピックを考える　8
コロナ禍を機に、オリンピックと学生スポーツのあり方を問う　田淵　和彦　8
座談会　同志社人が語るオリンピック　道永宏／川中恵一／朝原宣治／西村麻子　11

私の研究・私の授業
2020年度岡本ゼミオンライン海外フィールドワークを終えて　岡本由美子　18

不条理な現実への怒りや葛藤を変化へのパワーに変える
—北米日系人史から学ぶ生き方— ——— 和泉　真澄　20
言語としての数理モデル ——— 岩本真裕子　22
ポストコロナ時代の心理学 ——— 及川　昌典　24
都市や地域のデザインに貢献をする研究を ——— 麻生　美希　26

特別寄稿
同志社国際学院初等部の10年間の教育を振り返る—ロハス亜紀／岡田智明／荒谷達彦　28
建物案内　志高館（同志社大学） ———　33
建物案内　翼翔館（同志社中学校・高等学校） ———　34
同志社の逸品　新島襄が採取した葉化石 ——— 同志社社史資料センター　35

同志社ナウ
アーチェリー部女子、全日本学生王座決定戦優勝 ——— 大学アーチェリー部　37
甘南備山登山マップ刷新に協力 — 女子大学 学芸学部・文学研究科事務室（メディア創造学科）　38
リモート合唱への挑戦 ——— 村上　準　39
新型コロナ感染症禍でのクラブ活動—同志社香里高校ラグビー部の活躍— ——— 清鶴敏也／藤原涼　40
コロナ禍における保健室運営 ——— 田中　舞　41

同志社クローズ・アップ
コロナ禍における祈祷会 ——— 法人部法人事務室　42
第145回同志社EVE
「Sparkle〜あなたと見つける新しいEVE〜」オンラインにて開催 ——— 大学今出川校地学生支援課　44

２０２０オンライン同志社クローバー祭 ―――――――――― 大学京田辺校地学生支援課 46
動物介在教育の実践 ～スクールドッグ「スー」の役割～ ―――――――――― 青木 潤一 48
２０２０年度コロナ禍での体育祭・文化祭 ―――――――――― 石井 莉乃 50
女子中高とＩＣＴ 休校中の学びに対して ～学びを止めないために～ ―――――――――― 川嶋 有一 52
コロナ禍の中の学校行事 ―――――――――― 本田 学 54
Love's Labours Gained
～ "For stony limits cannot hold love out And what love can do that dares love attempt" ～
―――――――――― Timothy L. MEDLOCK 56

新刊紹介

新版 交通犯罪対策の研究・川本哲郎著／カルチャー・ミックスⅢ―「文化交換」の美学的展開編・清瀬みさを編著／教員の報酬制度と労使関係―労働力取引の日米比較・岩月真也著／変容する「二世」の越境性―１９４０年代日米布伯の日系人と教育・吉田亮編著／キリスト教史の学び（上下）・越川弘英著／新装増補版 今、礼拝を考える―ドラマ・リタジー・共同体・越川弘英著／教養の会計学―ゲーム理論と実験でデザインする・田口聡志著／ブレグジット×トランプの時代―金融危機と民主主義の溶解・小野塚佳光著／歴史の教訓―「失敗の本質」と国家戦略・兼原信克著／独居高齢者のセルフ・ネグレクト研究―当事者の語り・鄭熙聖著／イスラームからヨーロッパをみる―社会の深層で何が起きているのか・内藤正典著／「超」働き方改革―四次元の「分ける」戦略・太田肇著／不思議の国のロンドン・臼井雅美著／「共に生きる」ための経済学・浜矩子著／入門 埋蔵文化財と考古学・水ノ江和同著／暮らしの古典歳時記・吉海直人著 58

●本誌では学校法人同志社の各学校名から「同志社」を省略して、左記のとおり表記しています。
大学＝同志社大学、女子大学＝同志社女子大学、中学校・高等学校＝同志社中学校・高等学校、香里中学校・高等学校＝同志社香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校＝同志社女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校＝同志社国際中学校・高等学校、小学校＝同志社小学校、国際学院初等部・国際学院国際部＝同志社国際学院初等部・同志社国際学院国際部、幼稚園＝同志社幼稚園

●執筆者等の役職・職位は２０２１年４月１日現在、大学広報課が把握している範囲で表示しています。

アナウンサーは天職

言葉で人を幸せにして人生の選択肢を増やしてもらいたい

コミュニケーション能力を買われ、2020年３月から夕方の報道番組でキャスターを務める32歳。「アナウンサーになれたことは人生最大の幸せ」と言う若き同志社人に、志を伺いました。

濱田隼平（はまだ じゅんぺい）さん
アナウンサー

挫折を癒された体験から言葉の力に目覚める

――同志社大学の志望動機を教えてください。

濱田　私の母校である相生高校の先輩に、同志社大学の硬式野球部で活躍された山田勝司さん（01年法卒）がおられます。現在、東邦ガス硬式野球部の監督です。私も野球をしていたので、山田さんに憧れて同志社に行こうと。大学案内が届いた時、あの紫色と三角形の徽章、「同じ志の社（やしろ）」という校名を見て他の大学にまったく興味が湧かなくなり、同志社しか受けませんでした。縁でしょうか。

――なぜアナウンサーを志されたのですか。

濱田　高校時代に先生のひと言で英語が好きになったり野球に対する意識が変わったりした経験から、教員を目指した時期もありました。でも自分の好きなことは何かと熟考した時に、物事を伝えることで、人がより幸せになってほしいという思いがあったことに気づきました。大学３年の時、練習中に顎を骨折したことがあります。入院中、いろいろ考えました。野球部では周囲のレベルが高すぎて当時の私は劣等感でいっぱいになり、練習から逃げようとしていた。それを後悔して頑張り出した時のけがでした。その時、隣に入院しておられた方がたまたま私の話を聴いてくださったんですね。人生は９割が辛くて１割が幸せなんだ、たまに食べるケーキが美味しいから幸せを感じるんだ、人生もそれと一緒だと話してくださった。とても気が楽になり、言葉って凄いなと思いました。そこから言葉で人を幸せにしたい、誰かを楽しませたいと思って、アナウンサーへの関心が生まれていきました。

――出演番組について教えてください。

濱田　夕方の報道番組「キャッチ！」で、月・火曜はキャスター、水・金曜は中継リポーター、土・日曜に隔週でスポーツ中継の実況をしています。カバンを背負って街を歩く「ぶらり旅」というコーナーも担当しています。

――やりがいは何ですか。

濱田　すべての仕事にモチベーションを持って当たっていますが、特に「ぶらり旅」は台本がない仕事。自分で言葉を紡ぐ難しさや、いきなり声をかけた方にどこまで踏み込んでいいのかを、瞬時に距離感を測りながら判断する難しさがあります。その困難を突破して人の笑顔や町

の魅力を引き出すところに、一番やりがいを感じます。いつも観ているよ、笑わせてもらっているよという反応を街でダイレクトに聞く瞬間が嬉しいですね。

言葉は諸刃の剣
使い手としての技量も磨きたい

――コロナ禍で社会全体が不安に陥った年でした。気づいたことはありますか。

濱田　自粛期間は人との接触がかなり制限され、漠然とした不安に襲われた方もいれば、SNSで誰かを攻撃するなど人の心が凶暴化したケースもありました。人の心がブレた期間でもあったと思います。だからこそ相手を思いやり、人の心が安らぐようなコミュニケーションの大切さに改めて気づきました。

――コロナ報道の難しさは何でしょうか。

濱田　報道人として肯定、否定のどちらかに偏ることなく、必ず両方の可能性を伝えることを心がけてきたものの、反省点も多かったです。最初は「外出を控えてください」と結構強めに言っていましたが、見方を変えれば、感染者に非があるかのような伝え方ですね。一番辛いのは感染した人だから、当事者が辛い思いをしないような伝え方があるはず。マスクにしても着用が義務のようになっていますが、肌荒れがひどかったり、着けると過呼吸になったりする人もいる。そういう方たちをフォローするひと言を入れるよう、今も心がけています。専門家から日々情報収集をしながらの報道ですが、研究者の中でもどんどん考えが変わってきます。当初はもっと多方向の意見を集めればよかったという反省もありました。

――守っていきたい志を教えてください。

濱田　言葉に関することは、とことん追求したいです。30代はさらに知識・教養を身につけ、チャレンジをやめずに自分の幅を広げて、より多くの人に共感し喜んでいただける話をしたい。言葉の深みを出して、この人の話なら聴いてみたいと思ってもらえるようになりたいですね。

――将来やってみたい仕事はありますか。

濱田　かなり先の目標ですが、退職後はセカンドキャリアとして大学教授になり、ゼミを持ってみたい。自分が培ったものを還元できるような分野で教えてみたいです。そのために将来余裕ができれば、もう一度大学で学ぶのもいい。それとは別に全国で講演を行い、言葉の素晴らしさや可能性を伝えたいです。関西人なので、本当はお笑い芸人にも憧れています。笑いで世の中を幸せにすることが最終的な目標かもしれません(笑)。

――学生時代の思い出話をお願いします。

濱田　「教職概論」の宮坂朋幸先生にアナウンサー志望であることを話して、授業の終わりに大教室で10分間しゃべらせていただいたことがあります。学生には出席代わりに感想文を提出してもらうことまで提案しました(笑)。その感想文を読み、伝える喜びをさらに感じてアナウンサーを目指す思いを強くしました。

――若い同志社人へメッセージをいただけますか。

濱田　同志社大学で私の周囲には、いつも高い志を持つ仲間がいました。ミスキャンパス同志社を立ち上げた同級生もいるし、読売巨人軍の小林誠司捕手(12年商卒)は野球部の1学年後輩です。ナゴヤドームで会った時には誇らしく思ったと同時に、自分もさらに上を目指そうと思わせてくれた。在学生の方にはそんな仲間を大切にしながら青春を謳歌してほしいし、卒業生の方は学んできたことにおごらず、同志社人としての誇りを持ち続けて欲しいです。

(2020年11月16日、名古屋市にて)

パラリンピックで日本を変える

笑顔とパラスポーツで共生社会の実現に寄与したい

笑いで人を助けたいと、大学で学んだのは心理学。子ども時代は水泳に打ち込み、留学時代はパラ・アイスホッケーのカナダ代表、2016年に始めたパラ・パワーリフティングでも日本代表を狙う位置に。仕事ではパラスポーツの普及と共生社会の実現に取り組む、パワフルな卒業生です。

山本恵理（やまもとえり）さん
パラ・パワーリフティング選手

笑いで人を助けたくて心理学を学びに同志社へ

——同志社大学への入学動機をお聞かせください。

山本　私は先天性の二分脊椎症で、両足が不自由です。皮膚の感覚もない部分があるため、高校2年の夏、プールサイドのコンクリートで太ももに重度の火傷を負いました。1年間入院し、9歳から続けていた水泳も諦めざるを得なくなった。その入院中に、複雑骨折をした男性と知り合いました。笑顔で過ごす私を見て、その方が「死のうと思っていたけど、また生きてみようと思った」と言ってくださった。私でもできることがあるんだ、将来は人を助ける仕事をしたいと思いました。その頃、笑いで患者を癒す医師を描いた映画「パッチ・アダムス」に衝撃を受けたことも影響しました。将来を再考し始めた私に母が勧めてくれたのが、心理学の勉強です。大学選びでは、パラリンピックのシドニー大会に水泳で出場された宮本圭さん（2003年3月文学部卒）の影響が大きかったです。AO入試の面接では「笑いの研究をしたい」とアピールしました。ちょうど面接官に感情心理学がご専門の鈴木直人先生がおられ、後にゼミでもお世話になりました。

——大学院でも学ばれました。

山本　パフォーマンスの向上に笑いが影響を与える研究を行いました。試合前にお笑いのビデオを観てリラックスするアスリートは多いです。笑いが緊張を緩和して、ちょうど良い覚醒状態に持っていくのではという仮説を検証しました。

——カナダ留学もされましたね。

山本　2008年、パラリンピック北京大会にメンタルトレーナーとして帯同しました。その際、選手の役に立てなかったという悔いが残り、英語力の必要性も痛感しました。そこで留学して、障がい者スポーツを学ぶことにしました。私の研究テーマは、先天性と後天性の障がい者が、どのようにアスレティック・アイデンティティを確立させるのかというもの。対象は女性アスリートに絞りました。先天性の人は社会的にも自己の環境的にも、そもそも周囲と競争しにくい環境にいます。自分はアスリートだという自己認知を得るには時間がかかります。自分がアスリートだという意識は、後天性の障がい者の方が立ち上がりやすいのです。また女性の障がい者アスリートは、障がい者であ

ることと女性であることによって、社会からアスリート像として二重に認知されにくいという問題があります。Double discrimination、二重の差別です。私自身も健常者と一緒に泳ぐ訳ではなく、子どもの頃からパラ水泳で1位になっても、自分がアスリートになると言ってはいけないと考えていました。自分がアスリートだと思い始めたのは、ここ2、3年です。

パラリンピックに出場して社会を変えたい

——現在のお仕事を教えてください。

山本　日本財団パラリンピックサポートセンター（パラサポ）で、共生社会を実現するためのプロジェクトの一つでもある「あすチャレ！Academy／あすチャレ！ジュニアアカデミー」の企画開発、および講師育成、自身も講師として研修をしています。パラアスリートを中心とした障がい当事者が講師となり、障がいの疑似体験やパラスポーツの魅力を伝え、共生社会を考える研修プログラムです。コロナ禍の中で2020年8月から、オンライン版も始めました。企業での研修や、学校の道徳や大学の保育科の授業に導入していただいたこともあります。

——山本さんの考える共生社会とは、どのようなものですか。

山本　障がいがあってもなくても共に同じゴールを目指せる社会です。障がい者に手を貸す人を「いい人」と表現する人がいますが、私はいい人を作ろうと思って活動している訳ではありません。隣人を気にかけて声を掛け合うことは、社会人の基本的なスキルです。そういう考え方が当たり前の社会になってほしい。パラサポで働いて5年が過ぎましたが、自身の生活を振り返ってみても課題は山積しています。パラリンピックを単なるイベントに終わらせず、その理念を一人ひとりの生活に落とし込み、社会に定着させるのが、今後の私たちの仕事だと思います。

——お仕事と両立しているパラ・パワーリフティングについて教えてください。

山本　パワーリフティングに出会ったのは2016年5月、パラスポーツの体験イベントを視察した時でした。いきなり40キロを上げたため、競技に誘われました。上半身の筋力だけを使うベンチプレスなので、自分に残された力を上半身にいかにうまく伝えられるかがポイントです。試技はわずか3秒ほど。考える暇はないし、失敗しても挽回する時間はありません。バーベルをラックから外して静止させ、スタートの合図で胸まで下ろして止め、再び上げる。胸で止める技術は非常に奥が深いし、一流の選手は一連の動きがとてもきれい。試合ではぜひ、その美しさも見てほしいです。パラリンピック参加標準記録の65キロまでは、あと2キロ。実際より重いバーベルを上げていると思えば余裕を持って力を発揮できるので、最近は80キロを上げるつもりで記録更新に挑んでいます。

——大学時代の思い出をお願いします。

山本　同志社大学に入って障がいがあっても健常者と同じ環境で授業が受けられると思った時、初めて世界が開けました。鈴木先生から「倜儻不羈（てきとうふき）な人になりなさい」と言われたことも印象に残ります。自立して、自由な発想で生きなさいと。それまで私の道は限られていると思っていたし、就ける職業も少ないと考えていました。でもその言葉で、私は何になってもいいんだと思えた。だからこそ自由な発想によって、パラリンピックで社会を変えたいと強く思います。これから社会に巣立つ若い方たちも、得意なこと、やりたいことを常に考えて、ぜひ実現させてください。

（2020年12月22日、東京にて）

田淵和彦名誉教授に聞く

コロナ禍を機に、オリンピックと学生スポーツのあり方を問う

田淵和彦（たぶちかずひこ）　（同志社大学名誉教授）

コロナ禍での東京五輪・パラリンピック開催を前にさまざまな課題が指摘されています。フェンシング日本代表選手・役員として長年オリンピックに関わってこられた田淵和彦先生に、オリンピックや学生スポーツのあり方について伺いました。

フェンシングを通じて垣間見た世界

――1960年ローマ、1964年東京と2回のオリンピックに出場されていますが、フェンシングを始められたのは大学からだったそうですね。

はい。高校までは野球部でしたが、自分の能力の限界に挑戦したいと思い、個人競技のフェンシングに転向しました。60人ほど部員がいるなか、常に一歩前進することを考え、練習をしました。帰宅後は高野川や鴨川の堤を走り、庭に丸太を据えつけて「突き」の練習に励みました。角材とちがって丸太は滑るのでなかなか突けないのですが、うまく突けるようになって穴があくと、今度は夜、暗闇のなかでもその穴を突けるようにと、日夜キツツキのようにカンカン突いたものです。街中を歩くときもすれ違う人との間合いを計ったりステップを踏んだりと、日常生活の中でいろんな〝運動〟を考え、工夫し、道場で実践とつなぐ練習を重ね続けた大学時代でした。

――日本のトップクラスの部員もいるなか日本学生選手権、全日本選手権で優勝し、イタリア・トリノで開催された第一回ユニバーシアードに出場されました。その後のオリンピックと海外でのご経験についてお話しください。

ローマオリンピックでは、スポーツの世界の広さと多種多様さに目を開かれました。フェンシングにおいてはレベルも高く、練習はスポーツ医科学の知見に基づいて行われていました。選手の体調をデータ管理している国もありました（医・科学の力を支えに戦う選手）。また、マラソンの応援に行ったとき、エチオピアのアベベ選手が硬い石だたみのアッピア街道を信じられないスピードで走り去っていきました。しかも裸足でしたからその姿は衝撃的でした（自然環境の中でつくられた体力で戦う選手）。一方で、自転車競技では、興奮剤を服用した選手がゴール後に急死するという事件が起きました。初めて「ドーピング」が問題となった大会でした（薬物を使って戦う選手）。このようにローマ大会では多くの刺激をうけ、「自分はこのままでは勝てない」と、4年後の東京大会へ向けて気持ちを新たにしました。

強化選手に選ばれ、2年間フランス国立スポーツ体育研究所（現・フランス国立スポーツ・科学・競技力研究所）へ留学した経験は大きかったです。当初は、選手の強化育成だけでなく、指導者の養成機関でもあり、近隣の小学生を教えるカリキュラムもありました。フランスの子どもは、問題意識がとても強く、驚きました。「なぜ?どうして?これではだめなの?」と次々と質問がでてきます。一方的に教えるのでなく「問いかけて聞く」という対話を通して、いろんな考え方や行動の選択肢を引き出すのですね。創造性や自立心を育む指導方法は学ぶところが多く、指導者になってからの基礎となりました。

このフランス留学では様々な経験をしました。フェンシングがあまり盛んでなかった日本から来たということで、最初の試合を中高生と対戦させられた悔しい思いをしたこともあります。しかしこれに奮い立たされ、実力を示しどんどん勝利していくと現地の新聞で大きく取り上げられ、以降ナショナルクラスの試合にも出られるようになりました。

こうしてフランスで実践経験を積み、東京オリンピックの代表に選ばれました。東京オリンピックの入場行進で94ヵ国の最後に国立競技場へ足を踏み入れたときの感動は忘れられません。メインスタンドの貴賓席を見上げると両陛下が手を振っておられる姿が目にはいり、日本が敗戦からここまで復興したことを世界の人々に見てもらっているという誇らしさで胸がいっぱいになりました。

オリンピックの原点に立ち返って見直しを

――東京大会で男子フルーレ団体4位入賞という輝かしい成績を残された後は日本代表監督・役員としてオリンピックに関わってこられましたが、オリンピックを取り巻く問題について、どのようにお考えですか。

コロナウイルスの世界的な感染拡大にともない、2020年東京オリンピックは延期になり、現在も開催が危ぶまれている*状況で、出場を目標にしてきた選手の皆さんは複雑な思いを抱えていることでしょう。開催の可否はともかく、この機に原点に立ち返り、オリンピック開催の意義を考えることも大切だと思います。

オリンピックの精神とは、「人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てることである」とオリンピック憲章で定められています。オリンピックは、ただ順位やメダルの色を競い合うのでなく、世界のアスリートが心をひとつにして平和を願う祭典であるという点です。これが世界選手権との大きな違いです。

オリンピックが「平和を願う祭典」とされるその象徴の一つに選手村があります。選手村は、人種・宗教や政治に関係

なく、すべての選手が同じ条件で競い、国を越えて交流できるよう環境が整えられた場所です。私もいろんな国の選手と親しくなり、食事をしながらワイワイ語り合いました。言葉は不十分でも、スポーツという共通項を通じて絆を育むことができたのです。

ところが、近年では選手村を利用しない選手やチームが増えてきたと聞きます。近くにホテルをとって、個々の選手に合わせてカロリー計算した食事をとり、試合に備えるのです。国際オリンピック委員会（IOC）の意図から離れ、メダル至上主義、商業主義に走っているといえます。ほかにも国家主義、組織ぐるみのドーピング、大会の巨大化など、問題は多々あります。こうした流れの中で、オリンピックの純粋な〝平和の祭典〟という美しい言葉もうすらいでいっております。今回の東京五輪・パラリンピックは、オリンピック史上例のない形となるだけにパンデミックと戦う人類の智恵と努力を駆使した〝平和の祭典〟であって欲しいと思います。

「知・徳・体」のバランスと自主性を

――同志社は田淵先生をはじめ多くのオリンピアンを輩出してきました。今回は、上山友裕（アーチェリー部 2010年商学部卒）そして、本学4年次生の田中希実さんが陸上競技で日本代表に内定しています。学生アスリートの活躍についてどう思われますか。

田中さんは、自らの意思で同志社を選び、スポーツ健康科学部での学びを競技にいかして、活躍されているのはすばらしいことです。

学業とスポーツの両立は当たり前のことですが、近年、競技レベルがどんどん高度化・専門化していき、スポーツを優先するあまり学業がおろそかになっている傾向があります。私は常々「同志社のスポーツ人である前に、学生であれ」といってきましたが、学業とスポーツの本来のバランスが崩れてきているように思います。

これは本人だけの責任ではなく、施設、指導者、財政面など、スポーツをする環境にも問題がありますが、学生スポーツのあり方が問われる時期にきているのではないでしょうか。

――「知・徳・体」の調和のとれた主体的な人間の育成を目指すという開学当初からの教育理念に通じるものですね。

そうですね。昨年末、本学出身の空手道選手・大野ひかるさん（2015年・大学スポーツ健康科学部卒）が全日本選手権で優勝したときの記事を読み、「自主性が重視された同志社時代、強くなるために自分で考えながら練習した」という言葉に建学の精神・教えが息づいているのを感じました。

全世界がコロナ禍という未曽有の状況下で生活様式の転換を迫られ、アスリートたちもこれまでとは違う条件のもと競技をきわめていかねばなりません。同志社に受け継がれる「倜儻不羈」の精神で、一人ひとりが自ら考えて行動し、存分に力を発揮できるよう願っています。

＊2021年1月25日現在。

〈プロフィール〉

1960年同志社大学商学部卒業。同志社大学名誉教授。体育会監督会常任顧問、フェンシング部名誉監督。1960年ローマ、1964年東京と2回のオリンピックに出場し、東京ではフェンシング男子フルーレ団体4位入賞。オリンピック日本代表監督を2回歴任するなど、フェンシング競技の普及・発展に貢献。1997年藍綬褒章、2019年瑞宝中綬章受章。

座談会

同志社人が語る オリンピック

●出席者

道永宏（みちながひろし）氏　（79年商卒、アーチェリー、モントリオール五輪銀メダリスト
同志社大学体育会アーチェリー部監督）

川中恵一（かわなかけいいち）氏　（95年商卒、水泳、バルセロナ五輪
株式会社毎日放送 テレビ営業局 営業開発部長）

朝原宣治（あさはらのぶはる）氏　（95年商卒、陸上、アトランタ・シドニー・アテネ・北京五輪銀メダリスト
大阪ガス株式会社NOBY T&F CLUB 主宰
同志社大学スポーツ医科学研究センター 客員教授）

●司会

西村麻子（にしむらあさこ）氏　（00年商卒、株式会社毎日放送アナウンサー）

派遣批判をバネに19歳で銀メダル

西村●コロナ禍で社会状況は大きく変わり、スポーツ界も大きな影響を受けています。高校生たちの全国大会が中止になり、2021年に延期された東京オリンピックの開催も不透明です。一方でこのような状況だからこそ、スポーツができるありがたさを痛感された方も多いのではと思います。本日は同志社大学出身のオリンピアンの皆さんに、ご自身の経験を語っていただきながら、コロナ禍におけるスポーツのあり方についてご意見をいただきたいと思います。さっそくですが、道永さんは大学2年生でモントリオールオリンピックに出場されましたね。

道永●出場は2年生の7月でした。選考会は直前の5月。リーグ戦が終わった約1週間後で、ちょうど体がリフレッシュされた時でした。オリンピックはモントリオールの次のモスクワを目指す程度の気持ちだったので、遊びにいくつもりで選考会に出ました。試合は2日間あり、初日は4位。翌日は強い雨と寒さで有力

選手が崩れた。一番気楽な私がトップになり、オリンピック出場が決まりました。

西村●本番はいかがでしたか。

道永●直前に、極度の不振に陥りました。原因は疲労です。2、3日休むと急に記録が上がり出し、そのままオリンピックに突入しました。外国選手の情報はほとんどなかったので、自分の経験に照らし合わせながら一人ずつ対峙して競ううち、気づくと2位に。実は五輪のアーチェリーに日本が参加したのは初めてで、私は海外経験すらない。税金の無駄遣いだという批判記事も書かれました。悔しかったですが、期待されないから気楽でしたね。銀メダルを獲った後で監督に謝罪があったと聞き、報われたと思いました。

西村●とはいえ、4日間試合が続く訳ですよね。徐々にプレッシャーが強くなっていったのではありませんか。

道永●さすがに4日目は緊張したみたいです。つまずいて派手に転び、弓がちょっと歪んでしまった。それで緊張が解けました。予備の弓に替えて、その後は最後まで普通に競技ができました。

西村●お父様もアーチェリーの世界選手権代表だったので、喜ばれたでしょう。

道永●はい。試合会場にも来ていました。ただ父の影響でアーチェリーを始めたとはいえ、父に教えてもらった記憶はあまりありません。高校時代は練習場で、世界記録保持者や日本チャンピオンの練習を見ながら技術を覚えた感じです。そもそも小学校では陸上を、中学では器械体操をしていました。

西村●他競技の経験はアーチェリーに生きましたか。

道永●やはり体幹が鍛えられます。器械体操では、尋常ではないトレーニングをしていましたから。それがいざというときに役立ったのではと思います。

道永　宏氏

79年商卒、アーチェリー、モントリオール五輪銀メダリスト
同志社大学体育会アーチェリー部監督

水深80センチのプールが後半に強い泳ぎを生む

西村●川中さんも同じく大学2年生で、バルセロナオリンピックの水泳に出場されました。ご専門はバタフライですね。

川中●1年生の6月にパンパシフィック選手権の代表に選ばれ、初めて日本代表になりました。そのパンパシフィック選手権でタイムが伸びて200メートルで3位になったので、オリンピック出場への周囲からの期待は感じていました。同志社大学の水泳部からは、滅多にオリンピック選手は出ませんから。

西村●大学ではどんな練習をしておられたのですか。

川中●水泳部の練習環境はあまり良くなかったですね。専有の室内プールもなく、部員たちは夏になると田辺校地（現在の京田辺キャンパス）内の屋外プールや、高槻、城陽などOBの経営するスイミングスクールを転々としました。このような練習環境の中で、私は自分で考えたメニューで練習していました。パンパシフィック選手権の日本代表になれた1年生

川中　恵一氏
95年商卒、水泳、バルセロナ五輪
株式会社毎日放送 テレビ営業局
営業開発部長

の冬は、代表チームの合宿で揉まれて強化できましたね。世界に近い人たちと一緒に練習するとモチベーションが違うし、練習の濃さも全然違う。その代表合宿で、4月のオリンピック選考会に向けた調整がうまく行き、選考会で日本記録が出て代表になれました。

西村●オリンピックでは200メートルバタフライの決勝を、8人で泳がれました。150メートルのターンでは最下位でしたが、最後の50メートルは8人中、唯一30秒を切って5位に入賞。当時の日本記録を更新されました。最後に折り返した時の感触はいかがでしたか。

川中●私の体型は持久系だったので200メートルは得意でした。やはり後半のほうが強く、追い上げた実感はありました。実は私、スタートが苦手だったんです。高校2年生まで練習していたプールの水深が80センチしかなかった。浅く入るテクニックは身につくけれども、思い切って飛び込もうものなら頭を打ってしまうくらい浅いんです。ある時の代表合宿でコーチから飛び込みの時の空中姿勢についてアドバイスを受けたのですが、水深80センチのプールで長年身についた空中姿勢はそう簡単に矯正できないですよね。飛び込んだら体半分ぐらい、既に負けている。後半に強くなるしかなかったですね。

海外修行で飛躍し 4大会連続出場へ

西村●朝原さんはどのようにオリンピックを目指されたのですか。

朝原●私の学生時代は、同学年に川中君や奥野史子さん（95年商卒）の二人がバルセロナオリンピックに出場するというすごい世代でした。その姿を見て4年後のオリンピック出場への思いを強くしていました。当時の陸上はプロという将来像を描きにくく、大学で競技を終える予定でした。でもバルセロナに行けなかったことで次の目標ができた。私自身はオリンピックを目指して海外に出たかったので、その条件に合った大阪ガスに入社しました。入社後はドイツに行かせてもらい、オリンピックへまっしぐら。会社から給料をもらいながら、ほぼプロとして、初めてプロのコーチについてもらい競技に打ち込めた4年間でした。

西村●そこからアトランタ、シドニー、アテネ、北京と、4大会連続出場されました。

朝原●よく飽きずにやったなと思います。初出場の時が一番、感動的でした。私はいろんな人の活躍を見て自分も出たいと願い、目標に向かって自分の意思で練習してきて、最後にメダルが獲れた。そういう意味ではオリンピックを堪能した、夢が叶った選手ではないかなと思います。

西村●4大会目の4×100メートルリレーでは、日本のトラック競技史上初のメダルを獲得されました。喜びのあまりバトンを宙へ投げたシーンを覚えておられる方も多いと思います。

朝原●もうあれで、すっきりしましたね。

当時は36歳。本当は28歳のシドニー大会が私のピークだと思っていましたが、そこで2年間けがに悩まされて、個人種目に出られなかった。もやもやしたままシドニーが終わってしまい、メダルも獲れなかったので、北京大会までモチベーションが続いたのだと思います。

西村●一旦落ちかけたモチベーションをもう一度盛り上げて、オリンピックへ向かうのは大変だったでしょう。

朝原●うまく手を抜くなど、抑揚をつけて練習しました。ある程度リフレッシュすると、またモチベーションが上がってくることもありましたから。

コロナ禍を機に発想の転換を

西村●そのご経験から、コロナ禍で奮闘するアスリートたちへのアドバイスをいただけますでしょうか。

朝原●コロナ禍にあっても自己ベストが出ている選手は多いようです。今まで練習をやり過ぎていたのではないかな。選手を信頼せずに干渉し過ぎた部分があったのではと話すコーチも結構いました。

川中●水泳でも同様です。特にタイムスポーツはそんな感覚があるかもしれない。トレーニングのあり方を再考する契機になるのでは。日本人は真面目なので、体の弱い人や真面目な人ほどオーバートレーニングになり、故障しやすい。私は自分で判断して、疲れた時はさぼっていました。でも、それを言い出しにくい環境が日本にはある。1日泳がなかったら取り戻すのに1週間かかるから、最低５００メートルは泳がなければと昔は言われました。でも3日休んだら体調が良くなるかもしれないし、泳げなくても陸上トレーニングでケアできることが、今回分かったのではないでしょうか。

道永●アーチェリーはやや事情が違い、試合は朝から約6時間行われます。6時間の試合には6時間の練習をしていないと、集中力が保てません。今、大学ではコロナの関係で3時間しか練習できていません。なので、試合になると選手は相当疲れていますね。

川中●脳が疲れるのですか、体ですか。

道永●脳が疲れますね。

朝原●競技特性があるかもしれないですね。

道永●試合がないと目標がなくなり、練習に集中しづらくなる。トップレベルの子は次の試合があるのでそれなりの練習ができますが、初心者の子たちには、ちょっと辛い状況です。

オリンピックの変化と今後の大会が担う使命

西村●昔と今とでオリンピックの形は、どう変化してきましたか。

道永●モントリオール大会はアマチュアの大会でした。その後、スポーツの頂点を極めるという意味でロサンゼルス大会から一気にプロ化が進み、それと合わせて商業化が進みました。日本もその動きに追随しました。あれだけの大会ですから政治も絡み、莫大なお金も動きます。

朝原　宣治氏
95年商卒、陸上、アトランタ・シドニー・アテネ・北京五輪銀メダリスト
大阪ガス株式会社NOBY T&F CLUB 主宰
同志社大学スポーツ医科学研究センター 客員教授

お金が動くと選手がプレッシャーを感じて無理をする。平和の祭典というよりも、今はアスリートにとって酷な大会になっていると思います。

川中●私が出場したバルセロナ大会でも、プロ化が加速したと思います。アメリカのバスケットボールのドリームチームなどがそうです。道永さんのお話にあったように、ロサンゼルス大会からプロ化や商業化が始まり、テレビの放映権やスポンサーの意向などが大きく関係するようになりました。今メディアの現場にいると、選手の画像を使用することの肖像権をJOCやIOCがしっかり管理していることを強く感じます。もちろん選手を守ることは非常に大事ですが、それらがお金を生むから管理が厳しくなる。代表選手たちも、オリンピックで競技の認知度を高め、個人的にも名前をアピールしたい思いはあるでしょう。そこはメディアと利害が一致しても、実はその背後にはさまざまな規制があるのが現状ですね。

西村　麻子氏
00年商卒、株式会社毎日放送
アナウンサー

朝原●私がアトランタに出場した時はオリンピック初出場ということで純粋に競技をして、良い成績を出したいという気持ちでした。北京大会あたりになると、SNSの注意事項が細かく決められるようになりました。アスリートが自ら発信する時代になったのはいいけれど、それなりにリスクも高まり、責任が生じる。非常に複雑になってきたと思います。

西村●オリンピックの本来あるべき姿について、ご意見はありますか。

朝原●オリンピックでメダルを獲れば収入も相当増えます。オリンピックに出て有名になって収入を得たいという目的自体はいいと思います。が、それはオリンピック本来の目的ではないでしょう。IOCは、今こそ人のつながりや健康を考えようと言っていますね。私も同感です。オリンピック開催に向けて感染症に立ち向かう、人類がスポーツで一つになっていくというのは素晴らしいこと。しかし、実現は非常に難しい。それでも選手たちの頑張る姿は本当だし、多くの支援や助け合いも必要です。スポーツに関心のない一般の人にも、スポーツっていいものだな、役に立つんだなと捉えてもらえると、オリンピックにまた違った価値が生まれるのではないでしょうか。

西村●もし今年開催されなかったとしたら、アスリートにどんなメッセージを送られますか。

道永●一線を諦めるか次の大会を目指すかは、もちろん自分で決めるしかありません。自分の境遇、バックアップ体制など、さまざまな要因が関係するでしょう。ただ、メダルを獲るつもりで今まで努力してきたことに絶対悔いはないのだと、自信と誇りを持ってほしいですね。

学校教育におけるスポーツのあり方

西村●学校体育としてのスポーツのあり方についても、ご意見をお願いします。

道永●同志社大学の教育理念は知・徳・体を兼ね備えた人物の養成です。現実に

は、人によって知・徳・体のどこに重きを置くかを見極め、選手個人の目標に合つた指導をする必要があります。現在コロナ禍で大学での練習が不十分なため、兵庫県にある公共の練習場へ学生を連れていくのですが、そこでは70歳ぐらいの人たちがアーチェリーをしています。そして学生の練習をとても注意深く見ておられる。質問された学生が教えてあげることもある。学生は教えながら、自分のアーチェリーにも気づきがあって勉強になったそうです。そういう部分も学校のスポーツには大事だなと思いました。

西村●確かにそうですね。朝原さんはドイツにおられた時、地域スポーツの多様性を目の当たりにされたと思います。

朝原●日本のスポーツは基本的に学校スポーツが主体なので、交流範囲が制限されがちです。ドイツでは地域の皆が共有する場所があり、学校や年齢などに関係なく交流し、多様なスポーツをします。日本の運動部などで体罰やいじめが多いのも、人の入れ替わりが非常に少ないことが原因ではと思います。

川中●運営母体は自治体ですか。

朝原●ＮＰＯが運営し、企業がスポンサーになり、ｔｏｔｏのお金や会員の会費が使われます。会員が非常に多いので、この方法で成り立つんですね。そういうＮＰＯがドイツには日本と桁違いに多くあり、その一環でスポーツクラブも桁違いにたくさんあります。

西村●朝原さんは２０１０年に陸上のクラブ「NOBY TRACK&FIELD CLUB」を設立されました。どのような形のクラブですか。

朝原●もちろんドイツのような地域型スポーツクラブを目指していますが、まだまだ塾の側面が強いです。ただ、皆のクラブだと思っていろんな意見を言ってくださいとお願いしています。技量の向上だけでなく、子どもたちに友だちができたり親同士が知り合ったりと、コミュニティができているのは凄く嬉しいです。

川中●私も通っていたスイミングスクールという施設は、トップレベルだけでなく幅広いレベルの人が集うコミュニティです。これは一つの文化で、泳げる人が日本で多いことに貢献しているのかなと思います。水泳は故障しにくいスポーツでもあるので、健康増進の延長でマスターズの大会に取り組む人も多い。一方で競技になると、恐ろしく練習がハードで拘束時間も長いので、やめる人が多いですね。ときには休むことも必要でしょう。

朝原●学校の体育でスポーツ嫌いになる人はたくさんいる。それなら基礎知識を教え、あとは歳を取っても何かしらのスポーツを楽しむ人をたくさんつくる方がいい。私のクラブでは専門として打ち込んでいる子にはちゃんと教え、小学生に関しては、まず楽しいと思えるような指導を心掛けています。そうして楽しいを積み重ねながら、成長し、自主的に取り組む姿勢を培ってもらえたらと思っています。

スポーツにおける法人内各校の連携

西村●人生の糧になっていけばいいということですね。最後に、スポーツにおける同志社の中高大の連携について、ご提言をいただければ。現在、同志社にもＫＤＳＣ（京たなべ・同志社スポーツクラブ）という総合型地域スポーツクラブがあります。京都市内にそういう複合施設

があって、法人の中高大の生徒や学生が一緒に練習できるといいですね。

道永●大学の施設を利用する場合、中高生に交通費と時間という負担がかかりますね。大学の2校地間を結ぶシャトルバスを、もっと利用できるといい。また中高生の場合は、教員の引率が必須というのが一番のネックではないでしょうか。

川中●水泳の場合は多くの人が参加するとなると当然水の事故のリスクも高まります。法人での取り組みとなるとリスク管理を前提とした検討が必要ですね。

西村●NPO組織のようなスポーツクラブを外部につくるのはどうでしょうか。

道永●最近は高校のクラブ活動の指導者を外部から呼ぶケースも増えています。そうなると、中高大が一緒に行える可能性は出てきますね。

朝原●外部指導者がそれで生活できればいいのですが、良い人材を採るのはなかなか難しい。

西村●先ほどアーチェリーの練習で、気づきのお話がありました。大学生が中・高校でスポーツを教え、そこで自身の練習もするのはどうでしょうか。

朝原●イベント的に行うなら大丈夫ではないかな。日常的に行う場合は相当整備する必要があると思います。

川中●水泳部が地域のスイミングスクールなどに呼びかけて、京田辺で年1回、練習会と記録会みたいなイベントをしています。大学の施設自体は一般から見ると非常に立派なものだと思うので、活用できるといいですね。

西村●年1回から始めて、回数を少しずつ増やしていければ。

朝原●定期的に行っていれば、その交流から新たな企画が生まれて続いていくかもしれません。

西村●同志社スポーツも地域と一緒に盛り上がっていければいいですね。本日はありがとうございました。

2020年度岡本ゼミオンライン海外フィールドワークを終えて

岡本 由美子（おかもと ゆみこ）
（大学政策学部教授）

岡本ゼミは、これまでゼミ活動の中心にフィールドワーク（FW）を据えて来ました。演習Ⅱが始まる直前には徳島県上勝町、そして、夏休み終わりは、2011～2016年度はミャンマー、2017年度以降はアフリカのウガンダでFWを行ってきました。当初は現地での調査活動が主たる目的でしたが、現在では渡航前に自らが考えるコアな問題と要因分析、そして、どのようにそれを解決できるのか案を練り（仮説を立て）、現地サイドにぶつけます。

2020年度はFWを開始してから丁度10年目の節目の年でしたが、まさかの新型コロナウイルスの発生。4月当初は海外FWを諦めかけていました。しかし、アフリカのウガンダでもZoomを利用した会議システムが急速に広がりつつあることがわかり、従来通り、海外FWの準備を開始しました。

ウガンダでのリモート形式の海外FWは、表に掲載の通り、9月のほぼ1週間、毎日行いました。日本国内からの参加者は私を含め計18名でした。オンライン海外FWでは、新型コロナウイルスの影響を調査するのみならず、ゼミ学生が夏休み中に作成をした問題・課題解決のための提案を行い、現地サイドから様々なフィードバックをいただきました。オンライン上でも活気ある議論・交流ができました。

海外FW初日の9月16日（水）は恒例により、JICAウガンダ事務所と回線を繋ぎました。ゼミ生からはコロナ禍においてウガンダが直面していると思われる問題・課題の概要を発表する一方、所長さんからは現在の現地でのJICAの取組みについてお話しいただきました。JICAは先が見通せない中、臨機応変にできる国際協力から行っておられることがわかり、皆、心強い思いをしたものです。

9月17日（木）はウガンダの最高学府であるマケレレ大学の開発学部の新旧学部長の先生方と回線を繋ぎました。学生たちはあまり余力がない途上国が行うロックダウンは副作用が大きすぎて逆効果ではないか、との考えをぶつけました。

2020年9月16日（水）から22日（火）までのウガンダにおけるオンライン海外FW日程

日付	曜日	地域	ウガンダにおける訪問機関	相手機関参加者リスト
9月16日	水	首都カンパラ	JICAウガンダ事務所	所長、次長、所員（計3名）
9月17日	木	首都カンパラ	マケレレ大学開発学部	新旧学部長（2名）
9月18日	金	グル（北部ウガンダ）	北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト（NUFLIP）サイト	ローカルスタッフ（2名）
9月19日	土	ムバレ（東部ウガンダ）	ブフンボ小規模有機農家組合（BOFA）	組合長
9月21日	月	ワキソ（カンパラ近郊）	マバンバ湿地エコツーリズム協会（MWETA）	会長を含め3名
9月22日	火	首都カンパラ	COTS COTS LTD（Yamasen Uganda）	代表取締役社長

また、一番気になる農村の小学生も学習が継続できるようにリモートでのラジオ教育を提案しました。何と、ラジオを活用したリモート教育はムセベニ大統領が行おうとしていた対策でもあることがわかり、ゼミ生たちも勇気付けられました。

9月18日（金）はウガンダの中でも最も期待されているＯＤＡプロジェクトの一つである北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト（ＮＵＦＬＩＰ）のローカルスタッフ２名の方々と回線を繋ぎました。ＮＵＦＬＩＰの大きな問題の一つは、これまでのやり方では技術研修を行えなくなってしまったことです。コロナに対応した新しい形態の国際協力が求められるようになり、ゼミ生はそのための教材の提案を熱心に行いました。コストの問題さえクリアをすれば実現可能性もあることがわかり、大いに勇気付けられました。

9月19日（土）は、私岡本が２０１６年度より科学研究費を受給して行ってきた研究対象の一つであるウガンダ東部のコーヒー小規模有機農家組合（ＢＯＦＡ）に対して、学生たちは３つの提案を行いました。その一つがジェンダー問題への対処法です。上述のＮＵＦＬＩＰでは野菜栽培の技術移転や市場での販売方法を教えるだけでなく、生活の質の向上を目指してジェンダーの視点をプロジェクトに取り入れています。ゼミ生はＮＵＦＬＩＰからそれを学び、ＢＯＦＡの今後の取組みを提案しました。今回の大きな前進は、ジェンダー問題をより重要なＢＯＦＡの活動の一つとしていくという決意表明を組合長から聞けたことです。

9月21日（月）は、マバンバ湿地エコツーリズム協会（ＭＷＥＴＡ）との会合でした。事前に協会に対して行ったアンケート調査結果に基づき、観光収入減に伴う新たなビジネスの提案をゼミの学生が行いました。現地のＭＷＥＴＡのスタッフの一人がその方法を早速採用し、翌日から実行に移したことは見事としか言いようがありません。相手の行動に変化をもたらしたことは今年度のゼミ活動の大きな成果の一つです。

9月22日（火）、海外ＦＷ最終日は、同志社大学今出川校地新町キャンパスと縁が深い、Yamasen Uganda代表にお話を伺いました。この料亭は元々、同キャンパスから歩いて1、2分のところに立地していた京都の和食料理屋さんでしたが、4年前に突如、ウガンダのカンパラに移転してしまいました。２０２０年の3月末からのロックダウン政策で大丈夫かと思いきや、宅配サービス開始やメニューを工夫して以前より多くのローカルの人が来店するようになったそうです。ピンチをチャンスに変えていました。お見事です。

２０２０年度は実際に海外に渡航できませんでしたが、今できることはすべて行いました。実際に現地に渡航しての海外ＦＷを完全に代替するものではないですが、新たな海外ＦＷの可能性を見出すことができたと思います。このリモートでの海外ＦＷに参加したゼミ学生たちが、終了後、口々に、「来年度、実際に現地に行って、オンライン上で出会ったウガンダ人と実際に会えるのが待ち遠しく、ワクワクしている」、と言っていました。この言葉にこそ、今回のリモートでの海外ＦＷの成果があらわれているのではないでしょうか。

2020年9月22日（火）のオンライン海外FW最終日直後に撮影をした写真です。

不条理な現実への怒りや葛藤を変化へのパワーに変える
－北米日系人史から学ぶ生き方－

和泉（いずみ） 真澄（ますみ）
（大学グローバル地域文化学部教授）

歴史的体験を自分のこととして想像する

「もしあなたとあなたの家族が何の罪も犯していないのに、ある日突然、国からの命令で強制収容所に入れられたとします。収監されて1年が過ぎた頃、今度は収容所に家族を残したまま、その国の軍隊に入り、兵士として敵国である父と母の祖国と戦えと命令されたら、あなたは命令に従いますか？それとも徴兵を拒否して刑務所に入りますか？」

第二次世界大戦中の日系アメリカ人強制収容は、戦争と個人の自由、憲法による人権保障と国家安全保障との間の葛藤が人種主義と複雑に絡み合うという、民主主義国家が抱える相矛盾した現実を浮き彫りにしました。収容所では、従軍を呼びかける者、国籍離脱して日本への帰国を望む者、徴兵忌避する者、アメリカに忠誠を誓い収容所外での進学や就職に夢を託す者など、同じ家族同士でも意見が分かれ、関係を二度と修復できなかった例もありました。戦後の日系人は一から生活を再建し、アメリカ人として安定した暮らしを築きますが、戦後30年ほど経って、新たに成人した世代が、親である二世たちに疑問を投げかけました。「なぜあなた方は政府の不当な命令に従い、黙って収容所に行ったのですか？なぜ人種差別と戦わなかったのですか？」

この問題を授業で取り上げるとき、受講者にはアメリカ市民である日系二世が直面した究極の選択を想像してもらうと同時に、日系人がどのように差別を生き抜き、社会の矛盾と戦ったのか、また逆に模範的少数民族とも呼ばれた彼らが他のマイノリティへの差別にどのように加担したのかなどを、歴史的事例に照らして考えます。そして過去を単に知識として学ぶだけでなく、国家が誤った政策を遂行したときに個人はどのような行動をとるべきなのか、市民として何ができるのかを議論します。

国家安全保障と市民的自由との葛藤

私が２０１９年度に出版した２冊の本は、ともに社会に巣食う構造的人種主義や戦争中の政府の権力濫用と闘った日系人たちの運動を記述した歴史書です。The Rise and Fall of America's Concentration Camp Law: Civil Liberties Debates from the Internment to McCarthyism and the Radical 1960s (Temple University Press, 2019 アメリカ大学図書館協会優秀学術書に入選)、日本語版『日系アメリカ人強制収容と緊

急拘禁法―人種・治安・自由をめぐる記憶と葛藤』（明石書店、２００９年）は、１９５０年国内治安法第二部の緊急拘禁法の成立時と撤廃時に日系人強制収容の記憶がどのように語られ、それが法律にどのような影響を与えたかを論じています。マッカーシズム全盛期に作られた緊急拘禁法は、政府がスパイや利敵行為を行う可能性があると考える人物を予防拘禁できるとした法律ですが、意外なことにこの法を議論する連邦議会では、日系人強制収容は予防拘禁の「悪い先例」として繰り返し取り上げられています。日系人強制収容は民族的出自に基づく集団的予防拘禁であり、明らかに憲法違反の疑いがありました。立ち退き命令に違反したフレッド・コレマツに対する１９４４年の裁判で、最高裁は戦時中の軍の命令を合憲とする一方、政府の行為が人種差別であるかどうかは「厳格に審査しなければならない」という原則を示しました。１９５０年の緊急拘禁法成立の際には日系人の先例を踏まえ、予防拘禁の可否は人種ではなく個人の行為のみに基づいて判断すべきとされました。ところが、有事の際に予防拘禁を実行するためには平時から政府は個人の行動を監視し、危険人物を把握しておかねばならず、結局マッカーシズムは戦後アメリカ社会を現在へとつながる監視国家へと変えていきます。表立った人種差別が正当性を失う反面で、冷戦を口実としてＦＢＩは予算と人員を拡充し、労働運動家、公民権運動家、左翼知識人などを共産主義者として弾圧することに貢献しました。

日系人の体験を通して学ぶ社会運動史

１９６０年代後半のアメリカは公民権運動とベトナム反戦運動をきっかけに、より平等と自由を重んじる社会へと変わります。黒人コミュニティで強制収容所建設への恐怖が再び囁かれる中、緊急拘禁法の撤廃運動を率いたのは日系人たちでした。罪もなく強制収容所に入れられた先例を当事者が語ることで運動は支持を集め、１９７１年に緊急拘禁法は撤廃、強制収容所の建設を禁じる法律ができたのです。これをきっかけに日系人はそれまでの沈黙を破って自らの体験を公に語るようになり、１９８８年に政府から公式謝罪と一人二万ドルの個人補償を勝ち取りました。その後の日系コミュニティは、９１１同時多発テロ後の人種プロファイリング、トランプ大統領による一部イスラム教国からの入国禁止令や中南米移民の子どもたちを親から引き離して収監する政策などに批判の声を挙げ、アメリカの自由や人権に関する教育に一定の影響力を持つようになっています。

もう一冊の著書『日系カナダ人の移動と運動―知られざる日本人の越境生活史』（小鳥遊書房、２０２０年）では、日本からカナダへ移住した人々が太平洋を越えて築いた生活圏と、戦時中の強制移動を頂点とする様々な人種差別の中で日系人が生き抜き、差別と闘う中でカナダの多文化主義を草の根から支えた歴史を描きました（詳細は『同志社時報』１５０号参照）。

自分が動けば社会は変わる

２０２０年のアメリカ大統領選挙では、政権党が激烈な投票妨害を展開する中、各地のマイノリティ・コミュニティが組織的努力で投票率を上げ、選挙結果をひっくり返しました。一方、日本では社会的同調圧力が強まり、不満や不正があっても社会の平穏を乱さないことが重視されているように見えます。大学の授業が、少しでも自分が望む方向へ社会を変えていけるよう行動するきっかけとなればと思います。

言語としての数理モデル

岩本 真裕子（いわもと まゆこ）
（大学文化情報学部准教授）

数理モデル
―現象を理解するためのツール―

「カタツムリはどうやって進んでいるのですか?」私のところによく届く質問の一つです。しかし、私はカタツムリの専門家でもなければ生物学者でもありません。私は数理モデルや数学を使って研究をしています。

カタツムリは腹足類と呼ばれる巻貝の一種で、サザエやアワビなどと同じ分類です。腹足類のあの柔らかい部分（腹足）はネバネバした粘液で覆われていますが、実はこの粘液が特殊な性質を持っていて、這って移動するときに接地部分との摩擦をうまくコントロールしています。私たちの微分方程式を用いた数理モデル研究では、粘液の性質と腹足の筋肉の硬さの違いによって、様々な種が用いる異なる移動様式を同じメカニズムで理解できることを明らかにしました。このように、数理モデルを使えば、カタツムリだけでなくナメクジもサザエもヒザラガイも一つのモデルで表現・理解できるという面白さがあります。

数理モデルは今年思いがけず大きな注目を浴びました。新型コロナウイルスの感染流行に関して微分方程式を用いた数理モデルが用いられたためです。特にデータが少ない感染当初は、数理モデルは今後の行動指針を決める際に活躍しました。数理モデルは現象の理解・制御・予測に大変役に立ちますが、そこには仮定となる前提や条件があることには注意が必要です。数理モデルは、いくつかの仮定の下で予測を行っているため、予測は絶対ではなく、あくまでも可能性の話となります。当たらなければ意味がないという意見もあると思いますが、数理モデルにより、想定外だった未来を想定内にできるので、最悪の事態に備えることができるようになります。

今年はウイルスとの関わり方だけではなく、人間の行動や考え方についても深く考えさせられた一年となりました。社会では、集団全体にとっての利益を優先し行動する人と、個人にとっての利益を優先し行動する人が現れます。これらは固定されたものではなく、私たちは毎日様々な場面でどちらを優先すべきかと揺れ動いています。このような現象を「社会的ジレンマ」と言います。全員が同時に自分を優先すると社会は成り立たないわけですが、必ず全体の利益を優先する人が存在します。しかも全体優先と個人優先の人口比率はだいたい一定になる

（多くが8：2）ことが知られています。さらに驚くべきことに、これは人間の集団だけに見られる現象ではなく、倫理観があるとは思えない、細胞性粘菌・アリ・クモ・鳥などの群れでも見られます。

いくつかの生物で観察される共通した現象がある場合、個々の種の特徴を細かく調べるよりも、まずは共通に見られる部分を抽出し数理モデルで記述することが、現象理解の助けになります。そこで、私たちは「生物の行動の変化は他者とのコミュニケーションの後に起こりやすい」という点に注目し、微分方程式とセルオートマトンモデルを用いて数理モデルを作りました。モデルの計算結果により、全体の秩序（人口比率の調整）は、近くの人との特徴的な相互作用によって引き起こされることを明らかにしました。これはつまり、社会全体がどちら優先に傾くかは、個人間のローカルなコミュニケーションが大きな影響を及ぼすことを示しています。

データ駆動型数理モデルとプロセス駆動型数理モデルの融合へ

技術発展が進み、20年前とは比べ物にならないほど私たちは日々溢れるほどの情報を浴び、私たちの行動がデータとして蓄積されるようになりました。このビッグデータの時代を生き抜くためにデータサイエンス教育が進められていますが、データサイエンスに出てくるモデルと、前述の数理モデルは別のものです。昨今では、主にデータサイエンスで予測・推定などに使われるモデルを「データ駆動型」と呼び、例えば微分方程式などを使って記述されるモデルを「プロセス駆動型」と呼んで言い分けています。それぞれ数学の統計分野と力学系分野の発展によるものです。今後はどちらか一方ではなく、2つの数理モデルを融合させて活用していくことで、現代の複雑な現象や課題が解決できると期待されています。

プログラミング教育、データサイエンス教育、そして数理モデリング教育へ

私は大学を卒業後3年間、滋賀県の県立中高一貫校で数学教諭をしていました。中学生の時から教師になると決めていましたが、私の夢は教師になることではなく、「数学が嫌いな子どもを一人でも減らすこと」でした。まさか自分が大学で研究者となり教鞭を取ることになるとは想像していませんでしたが、今でも同じ夢を持っています。

日本の数学教育は非常に上手く体系化されているため、中・高の数学教育では、数学本来の面白さを伝えることは難しいと感じています。教科書は、先人が見つけた定理や法則の途中経過、つまり「モデリング」部分や失敗した部分を飛ばして綺麗な結果だけを教えてくれます。どう考えても「モデリング」が一番面白い部分なのですが、一方で、泥臭く時間のかかる部分であるため有限の時間で学ぶために除かれてしまったのは仕方がないことなのかもしれません。しかし、私は、現在の数学教育に「モデリング」という視点を入れるだけで、子どもたちの数学に対する印象は変わるのではないかと考えています。

プログラミング教育やデータサイエンス教育はとても有益なものですが、数学は役に立つから学ぶのだと考える子どもが増えてしまうことは懸念すべきことです。数学は役に立たなくても学びたいものです。なぜなら本来、とても楽しい学問だからです。また、役に立つから学ぶというスタイルには限界がありますし、新しい発見は、何の役に立つかもわからない泥臭い学びや失敗の中から生まれることが多いのです。今後は、数理モデリング学教育を普及させ、複雑な課題に泥臭くも粘り強く解決できる人材の育成に取り組んでいきたいと考えています。

ポストコロナ時代の心理学

及川 昌典（おいかわ まさのり）
（大学心理学部教授）

前向きな姿勢

新型コロナウイルスの発生によって、多くの人がストレスを受けています。しかし、各国の調査によると、回答者の65％近くがストレスの増加を報告している一方で、ストレスレベルはほぼ同じままだという人は20％前後、ストレスレベルが下がっているという人も15％います。オンライン授業やゼミでアンケートやインタビューをしてみると、やはり同様の結果が得られます。

世界中の人々が明らかに苦しんでいるときに、平気な顔をしていてもよいものでしょうか？たとえば、高価なレストランで豪華な食事をしようとしているときに、給与がカットされて食費を切り詰めている人々の状況が頭をよぎったと想像してみてください。このような状況で、幸せを感じてもよいのでしょうか？

モラルジレンマ

このような問題は、心理学ではモラルジレンマと呼ばれます。一方では、他の人が苦しんでいるときに幸せを感じることは、明らかに間違っているように感じられます。しかし、世の中には必ずどこかであなたよりも苦しんでいる人がいます。他人の不幸を他所に喜ぶことが許されないのであれば、人は常に苦しみ続けることになりそうです。

共感と思いやり

モラルジレンマを解決するには、共感（empathy）と思いやり（compassion）を区別する必要があります。心理学では、共感は他人の感情（特に、痛み、悲しみ、ストレスなどの否定的な感情）を感じる傾向と定義されます。共感的な人ほど、苦しんでいる人を見ると、自分もその苦しみを強く感じます。

それに対して、思いやりは、他の人のためになること（ストレスなどの否定的な感情を軽減することや、幸せの手助けをすること）を望むことと定義されます。思いやりのある人ほど、人の苦しみを軽減させたいと強く望みますが、必ずしも人の痛みや苦しみを自ら感じるとは限りません。

共感の落とし穴

人に共感することは良いことだと信じられていますが、共感は否定的な結果につながることもあります。第一に、共感

は人助けの能力を低下させることがあります。たとえば、お子様が試験の重圧でパニックになっているとします。あなたが共感してパニックになっても、事態は好転しません。この状況では、共感するよりも思いやりのある親として、必要なサポートを提供するべきです。

第二に、共感は偏見や差別を助長することがあります。一般に、人は自分に似ている内集団のメンバーに対しては共感しますが、外国人などの外集団のメンバーには、あまり共感しない傾向があるからです。思いやりは、それを必要とする人に公平に分配されるべきなのですが、共感は必ずしも平等かつ公平に働くわけではありません。

第三に、共感は合理的な判断を歪めることがあります。たとえば、自然災害の被災者を救うために、どれくらい募金をすればよいでしょうか?もちろん、それは被害の規模にもよると思います。たとえば、２０００人が被災した場合には、１０００人が被災した場合よりも、多額の寄付をしようとするかも知れません。実際に被害規模の情報を変えて、募金額を提示してもらう調査をしてみると、そのような合理的な結果が得られます。ところで、調査冊子に被災者の子どもの顔写真などを載せて共感を引き出すと、載せない場合に比べて募金額が増えるのですが、その場合には、被害規模が小さくても大きくても、募金額は変わりません。共感は感情的な反応ですので、合理的には考慮すべき情報があっても、あまり考慮されないのです。

心理学の役割

人に共感すべきではないのでしょうか?必ずしもそうとは限りません。家族や同僚と幸せを分かち合うことや、ペットに愛情を抱くことなど、前向きな気持ちであれば、共感は良いことです。共感はまた、他者を敬い、気にかけていることを知らせるシグナルでもあります。ただし、否定的な感情に共感すると、しばしば否定的な結果を導くのです。

新型コロナウイルスと最前線で戦う医療従事者など、エッセンシャルワーカーの一部には、共感性が高い人々がいます。しかし、共感性は燃え尽き症候群につながる可能性があります。無私の奉仕は燃え尽きる傾向があり、心のタンクが空になると、他の人を助けることができなくなります。一方で、思いやりのある人は、共感性が高い人よりも、燃え尽きが少ない傾向があります。思いやりのある人は、苦しむ人々に共感して燃え尽きるのではなく、苦しむ人々のためになることに喜びを感じ、利他的かつ幸福に生きることができます。

さて、世界中の人々が明らかに苦しんでいるときに、平気な顔をしていてもよいものでしょうか?心理学の役割は、人間が陥りやすい誤りを予測して、対策を練ることです。

常識で考えれば、他の人が苦しんでいるときに幸せを感じることは、明らかに間違っているように思えます。苦しんでいる人の痛みには共感すべきだと感じられるかもしれません。しかし、これまでお話ししてきたように、否定的な感情への共感は、人を助ける能力を低下させ、偏見や差別を助長し、合理的な判断を鈍らせ、長期的には燃え尽きることが懸念されます。未だ予断の許されない状況が続きますが、世界中の人々が明らかに苦しんでいるときだからこそ、心理学研究の成果を信頼して、思いやりを持って、幸せに過ごしましょう。

都市や地域のデザインに貢献をする研究を

麻生（あそう） 美希（みき）
（女子大学生活科学部准教授）

白川郷との出会い

私の専門とする都市計画は実学です。「生活に具体的に役に立つ学問」という意味ではどの学問も実学的な側面をもちますが、都市や地域の空間やそこで起こっている現象を読み解き、原因との間の因果関係を分析するだけではなく、それを計画（デザイン）につなげることが求められる学問です。そのため、地域活動に積極的に参画し、研究成果の地域への還元や計画提案を行っています。

歴史的建造物などの地域固有の資源を活かすまちづくりについて興味を持ち、岐阜県白川村を初めて訪れたのは15年前です。この村は世界文化遺産の白川郷の合掌造り集落を擁していますが、最初は合掌造りがいかに保存され、観光資源として活用されているのかを個人的興味に基づき研究していました。しかし、実際に地域に入ってみると白川郷は切実な問題を抱えていることに気づきます。最も深刻だったのが交通問題です。世界遺産登録以降の観光車両の急増により渋滞が発生し、住民の車両だけでなく救急や消防などの緊急車両も巻き込まれ、集落の本来の姿である生活空間としての質が大きく損なわれている状況でした。問題は村外にも知られており、新聞には村の対応不足を非難する専門家の記事が掲載され、危機遺産リスト入りを危ぶまれてもいました。もちろん地元行政や地域も問題解決に向けて動き、新たな交通システムを構築するための住民説明会を開催していましたが、集落内への観光車両の進入制限を行う案に対して土産物店・飲食店・民間駐車場の経営者から強い反対意見が出されるなど、議論が紛糾していました。この体験から、理想論だけではまちづくりは難しいことを学び、研究者として何ができるのか模索し始めることになります。他にも景観変容や観光の質の低下などの問題に直面することになり、博士後期課程に進学後は実際に白川郷に住みながら、問題解決のための調査や話し合いへの参画に取り組むようになりました。そして大学院修了後は、白川村役場の職員として「世界遺産マスタープラン」「白川村景観計画」「白川村観光基本計画」などの計画策定の主査を担うことになります。多様なステイクホルダ（利害関係者）がいる中での計画づくりは困難を伴いますが、地域に貢献できるやりがいがある仕事です。ありがたいことに

今も、空き家対策や防災、観光振興のお手伝いを続けています。

地域とともにビジョンを描き実現する景観研究

このように、地域が抱える問題やニーズに応えるための多様な研究を行ってきましたが、最も多くテーマとして取り組んできたのは文化的景観です。白川郷では、土地利用の変遷から伝統的集落としての特性を明らかにするとともに、各世帯の不動産の所有状況から景観保全の新たな仕組みを構築する研究や、村全域の地形・土地利用・法規制の分析により世界遺産のバッファゾーン（緩衝地帯）における景観管理手法を提案する研究を行ってきました。北海道美瑛町や沖縄県竹富島では、開発（土地造成や建築行為）可能性の予測とそれらの景観への影響度の分析を行い、景観計画の策定支援や準景観地区制度の導入の検討を行ってきました。フィジー共和国旧首都レブカではＪＩＣＡの国際協力の枠組みで、イギリス植民地時代を由来とするショップハウスや住宅、教会の実測調査や建築物の配置・形態の悉皆調査を行い、景観保全基準案の提案を行ってきました。現在は、北海道の景観まちづくりに生かすために、風土が似ているフィンランドの文化的景観の保全に関する研究や、アイヌ文化と近代開拓が空間的に融合している北海道平取町において、ＧＩＳ（地理情報システム）を活用した文化的景観としての価値の明確化とその保全方針の検討を行っています。どの研究も、行政や住民とともに景観のビジョンを描き、それを実現する仕組みづくりを行うための研究です。

まちづくりを学ぶということ

同志社女子大学に着任して４年目に突入しましたが、京都のまちづくりに関わる機会を少しずついただけるようになってきました。このような貴重な機会には、出来る限り研究室の学生と一緒に関わるようにしています。なぜならば、都市や地域の実態は決して座学では教えられないからです。京都市中京区の姉小路通では、おばんざいを切り口とした地域に根付く生活文化の掘り起こしや、地域と宿泊施設との軋轢を解消し、地域の文化に触れてもらうプログラムの企画や実施を「姉小路界隈を考える会」とともに行ってきました。２０２０年度は４名の学生が、姉小路の景観形成の課題と今後の参考となるグッドプラクティス（優良事例）の収集を行うワークショップに参加しています。

これ以外にも、都市空間研究室には自主的に地域に飛び込んでまちづくりの提案を行うことにチャレンジする学生が増えてきました。例えば、２０２０年度は「三条通デザインワークショップ」に３回生が３名参加しました。このワークショップは、地域の方々と学生との混合グループがそれぞれに８月から４ヶ月間かけてフィールドワークを積み重ね、三条通の将来の空間像を提案するというかなり高度なものでした。同じグループの建築や土木、都市計画を専門とする他大学の４回生や大学院生に対し、知識や表現スキル不足に苦労していましたが、三条通に真剣に向き合い、提案を何度も練り直し、自分なりに表現するという大きな経験をした学生の成長は著しいものでした。

私は白川郷に出会ったことで、まちづくりの意義や本質に触れることができました。まちづくりに興味のある人間生活学科の学生にも、そういった地域と出会う機会を提供していくことが大切だと考えています。

特別寄稿

同志社国際学院初等部の10年間の教育を振り返る

出席者

ロハス 亜紀（教頭）　岡田 智明（学務幹事）　荒谷 達彦（PYP Coordinator）

新しい小学校教育を牽引した10年間

ロハス●同志社国際学院は２０１１年に開校し、10周年を迎えました。本日は本校が果たしてきた役割と、これまでの教育を振り返りたいと思います。

岡田●本校は学校教育法第一条で定められた一条校、いわゆる日本の普通の学校のスタイルと、国際バカロレアが認定したＰＹＰ（Primary Years Programme）校、つまり国際的なカリキュラムのスタイルとが融合した小学校としてスタートしました。これら２つが融合した小学校は今まで日本には無く、どこにもモデルがありませんでした。一から作り上げていこうという大きな理想のもとでスタートしたため、最初は試行錯誤が非常に多かったですが、子どもたちも大変良く頑張りましたし、保護者の方々もとても温かく学校をサポートしてくださいました。保護者の方々にはラーニングコミュニティという形で一緒に教育を作っていきましょうと申し上げていますが、学校から言われたからではなく、自ら新しい学校のチャレンジに共感し、協力してくださ

るご家庭が非常に多いと感じます。したがって保護者、子どもと一緒に作ってきた学校という思いが、私たち教員の中にあります。

ロハス●本校の果たしてきた役割は、先進的な教育を積極的に行ってきたことに尽きるでしょう。社会の今後を考えたとき、子どもたちにどんな力をつけさせてあげたら良いかを念頭に置いて、教育に取り組んできました。

荒谷●目指しているところは間違いないという自信を持っていましたが、そこへ至る過程を探るのは難しかったです。ただ、今の社会の流れから同志社の自由主義や、自由に対する責任というものを考えると、良心教育や自ら行動を起こす大切さを教える教育は間違いなかったと確信が持てます。だからこそ、さらに私たちの教育を突き詰めていくことが今後は大事になってくると思います。

岡田●一番難しかったのは、「国際的」とか「インターナショナル」であることの雰囲気を理解し、私自身を変えていくことでした。それは今でも課題の一つです。英語で話せば国際的な雰囲気になるのかと言えば、そうではありません。相手の言いたいことを理解しようと努め、どんな手助けが必要かを考えて気遣いをする。そして自身も、主張すべきことは主張する。言語だけでなく、心と心が通じ合う雰囲気を、まず教員間で持つことが大事です。そして帰国子女たちが、海外で得た経験を生かせずに我慢して周囲に合わせるのではなく、その経験を周囲が積極的に受け入れることが、国際的な雰囲気作りに大切だと思います。本校では、そうすることがかなり自然になっています。教材も、国際的な雰囲気を生み出すようなものをできるだけ採択していきたいと考えています。

教科横断型の探究型学習で実社会に通じる力を育てる

ロハス　亜紀
教頭

ロハス●本校の柱の一つは国際バカロレアの認定校であることです。その大きな柱の一つである探究型学習については、教員、保護者、子どもたちも含め、皆で協力し、勉強しながら手探りで進めてきました。10年が経過し、学習内容も具体的に整備されて到達目標もできてきました。それについて今までの苦労や良い点を聞かせてください。

岡田●探究型学習とは、国語・算数・理科・社会というように教科を区切るのではなく、一つの到達テーマに向かって全部をつなぐ、教科横断型の学習スタイルです。今まで縦割り教科の指導しかしてこなかった私たち教員にとっては、非常に大変なチャレンジでした。最初は他のインターナショナルスクールの手法を真似たり、一条校としての普通の学習も組み込んだりしているうちに、いつのまにか教科書に沿った学習になってしまうなど、試行錯誤の連続でした。今はテーマに向かって物事を考える際に必要な視点、適した発表の手法など、子どもたちへ論理的に説明できるようになってきました。それは本校の財産であり、他校には真似のできない教育方法だと思います。

ロハス●本校では単元のことをユニット

と呼んでいますが、私もいくつか印象に残るユニットがあります。４年生を担任した時に、鉄・空気・水の性質を学ぶユニットがありました。探究型学習は子どもの実生活や実社会に役立つ学びを目的としますので、最終的には、鉄や水それぞれの性質を生かした商品の売り込みまでを、子どもたち自身で行いました。単に鉄を商品のどこかに使うのではなく、温められると体積が増えるという鉄の性質を利用した商品を考案し、それを売ってくれそうな会社を探し、自分で手紙を書いて売り込むのです。一例として、水を靴底に入れたシューズを考案した児童がいました。冬は温かく、夏は涼しくなるシューズです。これをシューズメーカーに送ったところ、割引チケットまで添えられた返事をいただきました。企業から反応があり、実社会との繋がりを持てたことは、子どもたちも非常に嬉しかったようです。他にもペットが快適に過ごせる小屋を考案したり、アイスキャンデーのメーカーには商品の人気投票結果をグラフにして送ったりしました。物質の性質を学ぶのは理科、手紙を書くのは国語、商品に売価をつけるのは算数の勉強です。いろいろな教科が一つの学びに入ってくる教科横断型学習によって、子ども自身に考えさせ、発想させる学びを大切にしています。教員にとっても難しいですが、座学にはないやり甲斐があります。一度始めると、戻れない面白さがあります。

岡田　智明
学務幹事

荒谷●６年生ではエネルギーを学習しました。ただ発電を学ぶだけでなく、世の中でエネルギーがどう使われ、どんな問題が起きているのかを考えるのです。持続可能なエネルギーにも触れますが、理想と現実との間で迷う部分も、まさに実社会のこととして子どもは体感します。そこから子どもは本気で考え、子どもたち同士で意見を交換し合う。きれい事だけの提案が出てくると子どもたち同士で指摘し合い、深め合っていきます。

ロハス●今はＶＵＣＡの時代です。Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）。車の自動運転にしても、５年、10年経てば当たり前になるでしょう。電気自動車が主流になり、ガソリン車は無くなるだろう。それが短いスパンで変化していく時代です。その中でどんな場面においても自分で正しい情報を得て解決策を考える力をつけるために、「探究」は確実に今後のキーワードになると思います。その探究型学習をさらに確立していくのが本校の目的です。

荒谷●子どもたちは今、大人になるために力をつけている途中だと感じています。やっていることは間違いないと、私たちにも自信になりました。

視野を広げる英語学習

ロハス●さて本校はバイリンガル校であり、ＴＩＥ（Time In English）と称して、英語学習にも力を入れています。現状の紹介をお願いします。

岡田●本校の場合、英語は自分の意思を伝えるためのツールであるという位置付けです。相手と意思の疎通ができること

の楽しさを知り、それが自分を豊かにするということに着目しています。経験の多いネイティヴの先生がたくさんいるので、子どもが間違った英語を話しても、言いたいことを汲み取ってもらえます。正しく直された文を子どもがリピートして会話が続くという形です。もちろんテストや発表もありますが、目的は実際の生活に使うこと。間違った英語でも恥ずかしいとは思わず、それが成長の一歩になるのだという空気が学校にできています。

荒谷●岡田先生は準備室時代から変われましたね。当初、英語の教育はご自分には無理だと話しておられました。

岡田●私は、それほど英語は得意ではありませんでした。きれいな発音で正しい英語を話せなければ、教育の意味がないと思っていました。でもネイティヴの先生から、それは違うと言われました。私なりに努力するうち、それが伝わったのでしょうか。子どもたちが大きく変わりました。

荒谷●校内で子どもたちは普通に英語を使っていますが、最初は英語力がゼロで入学する子もいます。他の勉強ができても、1学期は英語が分からなくて泣く子も必ずいます。でも2学期になると、笑顔で英語の歌を口ずさんだりしています。そして6年生になると、英語で堂々と発表している。子どもは凄いです。

ロハス●日本の幼稚園を出て、本校の卒業までに英検準1級を取った子どもがいました。子どもは成長するという、良い例です。外国語を勉強することはコミュニケーションのツールを学ぶだけでなく、違う国の文化を学び、自分を豊かにすることです。視野が広がります。それは相手をもっと理解できることに繋がります。バイリンガルとモノリンガルの子どもとでは、バイリンガルの子の方が読解力が高いというデータもあります。思考力や、多角的な視点から考える力がつくのだと思います。

荒谷●各国から来た先生たちと一緒に働く中で、他校では得られない視点を私たちも、もらっています。多国籍の先生たちがいることも本校の強みではないでしょうか。

ロハス●実際のカリキュラムでは、全体の約半分が英語による授業です。どのような効果があるでしょうか。

荒谷●社会科なら、日本の社会について学び、英語の授業ではさらに視野を広げて海外のことも学びます。国が違っても人の考えていることは一緒で、共通点があることも確認できる。視野が広がり、深まります。子どもたちの質問や発想は、私たちの予想を超えることもあります。こちらも真剣に向き合わないといけないと思わせてくれます。

ロハス●6年生の歴史の授業では、日本語で日本の歴史を学びます。ネイティヴの先生はシルクロードにフォーカスして、世界の繋がりが最終的に奈良に到達する話をする。視野が広がり、しかも自分の生活、文化と最終的に繋がることが学べます。

岡田●専科はすべて、1年生から英語による授業です。子ども達の活動と指示の言語が重なるので、英語が少々不得意な子でも理解できます。子どもたちはいろんな角度から英語に触れています。修学旅行ではアメリカへ行きますが、現地の学校と提携し、1対1でバディを作ります。たとえ英語が不得意な子でも、絶対に教員に助けを求めません。積極的にコミュニケーションをとり、「楽しかった」

と言って帰国します。伝えようとする経験が楽しいのではないでしょうか。バイリンガル教育の一番の利点は、相手を受け入れること、相手と通じ合うことの喜びでしょう。そのような喜びを得られることの素晴らしさを、ぜひ素地として小学校生活で身につけてほしいものです。

ロハス●本校の卒業生のうち、高校1、2年生で留学した子が7、8人いました。本校で一から英語を学んだ子も留学したと知って、嬉しかったです。本校で培った積極性をもとに、是非いろんなことにチャレンジして、社会を支える良い一員になってほしいです。

荒谷●小学校での経験が花開いたのでしょう。留学してよかった、自分が変わったという報告を聞くと嬉しいですね。

荒谷　達彦
PYP Coordinator

一貫教育の中で国際学院が果たす役割

ロハス●本校の卒業生は主に同志社国際中学校へ進学します。同志社の一貫教育の中で、本校が果たす役割とは何でしょうか。

荒谷●良心教育という同志社の建学の精神は本校と強く繋がっています。その中で本校では、英語だけでなく人間性を育てるという特徴を突き詰めていきたいです。

岡田●探究型学習に取り組んでいると、主体性が身につきます。自分で目的を持ってやりたいことを見つけた時に、自分ですべきことを考えて動ける人を育てたいですね。本校の卒業生が国際中学校・高等学校で、周囲の学生を引っ張っていけるキーパーソンになればと願っています。実際、本校の卒業生が中心になり、国際中学校・高等学校の雰囲気も変わったと聞きます。本校ではグループワークが多く、皆で声を掛け合って助け合う学びを日常的にしているので、中高生になっても中心になってクラスを動かす子が多いようです。自分だけでなく周囲も輝かせていける子どもになってくれればいいですね。

荒谷●確かに、周囲に声をかける卒業生が多いですね。国際中学校で本校の卒業生は全体の3分の1程度ですが、現在の生徒会長は中学校、高等学校ともに本校の卒業生です。

ロハス●さて次の10年、20年と、私たちは今後、どんな子どもを育てていきましょうか。

荒谷●10年前はＡＩという言葉も知りませんでした。次の10年はもっと、私たちの想像もつかない世の中になっているのではと思います。そんな時代に、主体的に考え行動し、表現する子になってくれれば、10年後の未来も拓けるでしょう。私たちがそういう教育をしていかないといけません。

ロハス●何があるか分からない時代だからこそ、自分で道を拓いていける子どもになってほしいですね。教員も頑張りましょう。

no.34

志高館
（同志社大学）

２０１２年10月、京都市から産業技術研究所繊維技術センター跡地を譲り受けて、烏丸キャンパスが開校しました。志高館はこれと同時に竣工した、同キャンパスの枢要な位置を占める建物です。館名は、『同志社大学設立ヲ要スル主意』の「人生ノ志操ヲ高尚ニシ、精神ヲ錬磨シ智力ヲ発達シ思考ヲ奥蘊ナラシメ、又人ヲシテ己ノ本分ヲ知リ人類ヲ愛シ」に由来します。

志高館では主に総合政策科学研究科、グローバル・スタディーズ研究科、グローバル地域文化学部、国際教育インスティテュートの教育を展開しています。また主要施設としては教室、研究室、オープン自習室のほか、海外ＴＶ放送等を用いる演習授業、収録やライブ配信が可能なサテライトスタジオとしても活用できるラーニング・スタジオを備えています。

建物は地上３階・地下１階建ての鉄筋コンクリート造で、煉瓦積の外観によって本学の歴史的景観の伝統を継承すると同時に、屋上緑化や太陽光発電システムの導入により地球環境にも配慮しています。建物内部には、地盤を掘り下げた中庭であるサンクンガーデンを造成するとともにその周囲にラウンジを配し、キャンパスに集う多様な人々が交流できる空間を形成しています。

建物案内

no.35

翼翔館

（同志社中学校・高等学校）

翼翔館 メインアリーナＬ：ラーネッド（左：サブアリーナ２　Ｓ：セイヴォリー）

サブアリーナ１　Ｍ：メレル

グラウンドから見る翼翔館

2021年１月28日　竣工式のようす

２０１８年６月第Ⅰ期工事着手。２０１９年10月メインアリーナ完成。１９６６年に竣工した旧南体育館は、メインアリーナ完成直後の10月下旬に解体され、岩倉校地に残された最後の大規模建築として「翼翔館」の第Ⅱ期工事がスタートした。２０１０年に中学が今出川から岩倉校地へ移転し中高が統合された後、10年の月日が経過、２０２０年12月末に工事が完了し、岩倉校地の大規模建築物が全て完成する事となった。当初、岩倉校地建築物の完成記念として、大々的な竣工式を計画していたが、昨年から猛威を振るい世界的な混乱を巻き起こしている新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、京都でも緊急事態宣言が発令される中、２０２１年１月28日、学内関係者のみの小規模な竣工式を執り行う事となった。旧体育館竣工当時高校３年生であった本校同窓生でもある八田総長・理事長先生から式辞を頂き、二万建築委員長の経過報告、山崎校長の挨拶と続き、移転統合当時の校長で、この新体育館が完成するこの年に定年を迎える木村前校長が、祈祷、祝祷者として竣工式を締めくくる事となり、小規模ながら感慨深い式典となった。

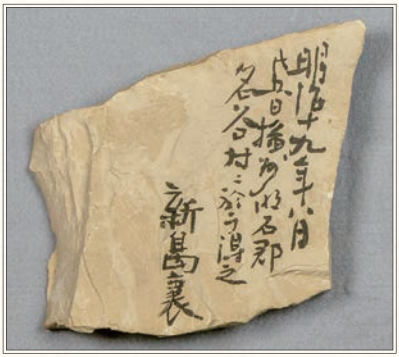
岩倉校地全体が風致地区内であり、かつ景観条例の掛かる、大変厳しい建築条件の中、香山壽夫建築研究所の見事な建築計画により建築審査会をパスする事ができた。また、２０２０東京オリンピックの建築ラッシュの中、建築資材の納品が遅れるなどの厳しい状況や、コロナ禍にも関わらず一人の感染者を出す事もなく、吉村建設工業のご尽力により、無事にこの素晴らしい建築を完成させる事ができ、大きな神の御手の力が働いたと感じる事となった。

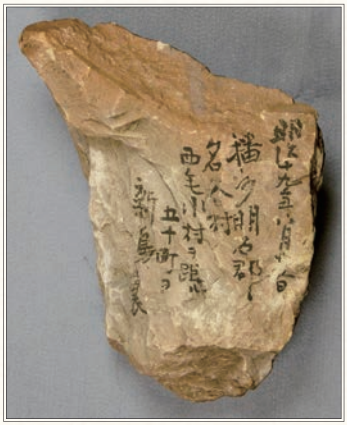
南体育館及び付属棟全体の名称「翼翔館」は、旧約のイザヤ書40章31節、詩編１３９篇10節などから引用され命名。また、大中小３つのアリーナを有し、メインアリーナ（大）Ｌ＝ラーネッド、サブアリーナ１（中）Ｍ＝メレル、サブアリーナ２（小）Ｓ＝セイヴォリーと、新島襄にゆかりのある方々の名前を、そのアリーナ名として命名された。

アーモスト大学はアメリカにおける学校体育発祥の地であり、新島はそこで先駆的な体育講義と実技を受けた最初の日本人学生であった。新島は、脱国に際し、「小鳥がかごの束縛からのがれて、快い大空へ舞い上がるような気持」と表現している。試練の向かい風を利用して翼を広げ、自由の空気に乗って大空を翔びまわることをイメージして命名されたこの「翼翔館」で学び、新島の想いを継承すると共に、未来に生きる生徒たちが、自由人として羽ばたく活躍を願っている。

— collection 13 —

新島襄が採取した葉化石





葉化石１　　葉化石２

創立者・新島襄の自宅（現・新島旧邸）を見学した際に、応接室にあるガラス戸棚に化石や鉱石、貝殻などが収められていたのを御覧になられた方もいるかもしれない。ガラス戸棚だけでなく、建物内には新島襄が個人で集めたと考えられる化石や鉱物、貝殻などが数多く保管されていたが、各資料に関する調査は未着手であった。これらのうち、化石と鉱物を対象として、二〇一七年（平成二十九）に同志社大学地学研究会及び同会ＯＢ会と共に学内外の研究者の協力を得て調査を行った。その成果が、ハリス理化学館同志社ギャラリー第十二回企画展図録「同志社大学地学研究会創立五十周年記念　新島襄が感じた地球」（以下第十二回企画展図録と略す）で公表されている。

この調査の対象となった化石及び鉱石は九十一点で、その中で最も特徴的で目を引く化石が、写真にある二点の葉化石である。

これらの葉化石には、共にその裏面に新島襄の直筆で墨字が書き込まれている。1の葉化石（法量　一一五×一二〇×二〇㎜）には「明治十九年八月廿五日播州明石郡名谷村ニ於テ得之　新島襄」、2の葉化石（法量　一六五×二二五×九二㎜）には「明治十九年八月□□（廿五）日播州明石郡名谷村西垂水村ヲ距ル五十町ヨ　新島襄」とある。いずれも一八八六年（明治十九）八月二十五日、明石郡名谷村（現・神戸市垂水区名谷町あたり）で新島が採取したことを伝える内容である。ちょうどこのころ、新島は八重と共に海水浴の為に隣接する垂水村に来ていた。二人の滞在期間は八月九日から二十八日までのおよそ三週間に及ぶ（『新島襄全集』八、三八八～三八九頁）。この間の新島の日記「出遊記」の記述をみると、日付の明示はないが、一八八六年八月ごろのページに「播州明石郡名谷村　岡本徳右衛門　○木ノ葉ノ事ヲ託ス」（『新島襄全集』五、二八七頁）と記述がある。この記述は、新島が明石滞在中に新島自身、あるいは誰かに依頼して採取した化石であることを傍証する内容である。これらの記録から、二点の葉化石は、新島が採取したものと見て間違いないと考えられる。

さらに、これらの化石は、他の新島旧蔵化石及び鉱物類には見られない、特有の価値を持つ可能性がある。同志社大学地学研究会「新島旧邸蔵地質標本の鑑定報告書」（第十二企画展図録所収）には、神戸層群から葉化石が産出した古い記録として、一八八四年（明治十七）及び一八九三年（明治二十六）の二例が先行研究を引用して報告されている。新島が採取した時期はこれらと同時期であり、採取の記録が残る神戸層群葉化石としては最古級という可能性もある。この意味で、二点の葉化石は、新島の学問的志向や嗜好を示すだけにとどまらない、固有の学術的価値を有する資料である。

同志社社史資料センター

同志社ナウ

アーチェリー部女子、全日本学生王座決定戦優勝

大学アーチェリー部

2020年9月15日～18日にかけて、第59回全日本学生アーチェリー男子王座決定戦、第55回全日本学生アーチェリー女子王座決定戦および第59回全日本学生アーチェリー個人選手権大会が行われました。新型コロナウイルスの影響により、王座決定戦は例年より3ヶ月遅れての開催となりましたが、女子は悲願の優勝を果たし、男子は第3位となりました。女子の王座優勝は8年ぶりの快挙です。

男女チーム合わせての記念撮影

『王座アベック優勝』を目標として掲げ続け、毎年その目標を達成するために全員で一丸となって練習をしていましたが、今回の女子優勝はその目標への大きな一歩となりました。

新型コロナウイルスが猛威を振るい、多くの試合が中止となった中で開催された王座決定戦。去年までは当たり前のように全員で練習していましたが、時間を区切り、人数を区切っての練習を余儀なくされました。そして試合当日は声を上げて応援することはおろか、円陣をすることすら叶いませんでした。それでも女子リーダーの安久詩乃（心理4）を中心として育んだチーム力で、当日は全員が安久の手作りの必勝の願いを込めたダルマのお守りを手に王座奪還へ心をひとつにしました。

女子チームと道永監督の記念撮影

2日目のトーナメント戦のセミファイナルでは突然の強風によってミスもありましたが、選手同士の強い信頼関係で決勝戦まで突き進みました。そして決勝戦では、女子リーダーの安久が最後の1射で70メートル先のわずか12センチの10点を打ち抜き、ストレートで勝利しました。

この優勝をゴールではなく、来年のアベック優勝へと繋げるものと出来るようにチーム一丸となって突き進みたいと思います。また、同志社大学体育会アーチェリー部のもうひとつの目標である「本当の日本一のチーム」になるために、プレイヤーとして一流なだけではなく、他者を重んじて常に協調性を持って行動の出来るメンバーが揃う、最高のチームをも目指して練習していきたいです。

試合中のハイタッチ（コロナ対策により肘タッチ）

甘南備山登山マップ刷新に協力

同志社ナウ

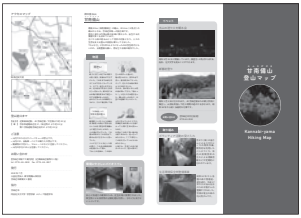
女子大学 学芸学部・文学研究科事務室（メディア創造学科）

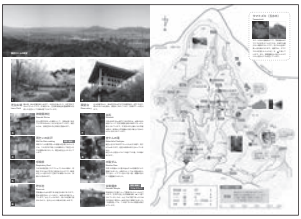
○神の宿る山 甘南備山について

標高221m（神南備神社）の雄山、201・6m（三角点）の雌山からなる、京田辺市唯一の独立峰です。南北に連なる生駒山脈の支峰に数えられ、自生する広葉樹が多くを占めています。古くから神の宿る山として信仰の対象となり、人々の生活を支える里山の役割を果たしてきました。「かんなび」と呼ばれるようになったのは弥生時代ともいわれ、五穀豊穣を願い、雨を乞う祈祷の場所でした。

○甘南備山登山マップ刷新に協力

公益社団法人薪甘南備山保存会からの要請を受け、同志社女子大学学芸学部情報メディア学科（2018年度入学生より「メディア創造学科」に名称変更）の学生2名、村田藍理さんと加藤綾羽さんが甘南備山の登山マップ刷新に協力しました。メディア創造学科 森公一教授の指導のもと、2019年の夏頃から制作を進めてきました。新たな登山マップ制作にあたり、実際に家族や保存会の担当者と甘南備山へ登り、登山ルートの確認や各名所の写真撮影を行うといった現地取材をしっかりと行いました。今回の登山マップはデザイン（色合いや配置など）だけでなく、紙の種類にもこだわり、手触り、風合いが特徴的で、上品なマップとなっています。表紙は甘南備山に自生するタマミズキの鮮やかな赤色をあしらっており、初めて甘南備山に来られる方でも一目でわかるように、各登山ルートや名所の写真を大きく載せ、子どもから大人まで親しめるように工夫を凝らした、見やすく持ちやすい登山マップに仕上がっています。2020年はコロナ禍の影響を受け、春以降は対面での打ち合わせができないなど思うように進められない難しさもありましたが、制作に関わる全員が協力し合って、登山マップを完成させることができました。新しい登山マップは3万部作成しており、京田辺市役所や近鉄新田辺駅の総合案内所で無料配布しています。これまで以上に多くの方の手に取っていただけることを期待しています。





完成後の集合写真（2020年9月撮影）

同志社ナウ

リモート合唱への挑戦

中学校・高等学校教諭　村上準（むらかみじゅん）

本校では、授業のほかに、本物の学びに触れる機会として多種多様な学びプロジェクトを行っています。その一環として、今秋、「Nコン2020に参加しよう！」を企画しました。NコンとはNHK全国学校音楽コンクールの略称で、毎年新しくつくられる合唱の課題曲に全国の児童生徒が取り組みます。プロジェクトには1～3年生の有志29人が参加しました。メンバーのほとんどが本格的な合唱に挑戦するのは初めてでしたが、「Nコンに出たい！」「全国の皆さんに歌声を届けたい！」という思いで練習に励んできました。

練習は全てリモート（オンライン）で、学校と各家庭をZoomで繋いで行いました。リモートでの合唱は教員も生徒も初めての経験で、試行錯誤の連続でした。最初は、お互いの声を聴いたり、ピアノに合わせて歌ったり、普段なら当たり前にできることがままならない状況でした。合唱はただ自分のパートを歌うのではなく、周りで歌っているメンバーの声を聴きながら、それに自分の声を重ねる意識が肝要なので、それができないのは非常に厳しいことでした。それぞれの歌声が本当に一つになるのだろうか、という不安でいっぱいでした。

しかし、知恵を出し合って練習方法を変えていくうちに、徐々にみんなが打ち解け、練習も軌道に乗り始めました。最もよかった練習法は、一人だけが音を出して歌い、他のメンバーはミュートにしつつその一人の歌声に合わせて自分のパートを歌うことです。一見簡単なことのように聞こえますが、みんなの前で一人だけ声を出すのは勇気が要ります。信頼感がなければできないことです。こういったことを続けるなかで、一人で歌うのではなく、みんなで歌っているのだという気付きが生まれたように思います。

練習の成果を各自が動画に収め、声を重ねてみると、驚くほど綺麗なハーモニーが出来上がっていました。メンバー一人ひとりの声が一つの合唱にうまく溶け込んだ、とても良い演奏になりました。完成した動画を生徒たちは嬉々として観ていました。「自分たちの声が、素晴らしい合唱をつくったんだ！」という満足感にあふれていました。

新型コロナの影響でたくさんの学校行事が中止を余儀なくされています。それでもチャレンジ精神を忘れなければ前進できることを子どもたちが体現してくれました。「初めての経験でしたが、とても楽しかったです！」「この状況で合唱ができるなんて思っていなかったので、一生懸命やってみることが大切だと思いました」などたくさんの感想が届いています。初めてのことにも果敢に挑戦することの大切さを感じ、それが達成できたときの喜びや成長の実感を体験してくれたのだと思います。

動画の最後には、自分に送るメッセージを載せました。「苦しみを乗り越えた先には必ず良い未来が待っている」「今だからこそできることにも目を向けて少しずつ進んでいきましょう！」など、心に響く前向きな言葉がずらっと並んでいます。観ている人、聴いている人に感動を届けられるような作品を作り上げることができました。

リモート合唱の様子

動画は、NHK全国学校音楽コンクールの公式サイト、および同志社中学校のYouTube公式チャンネルでご覧いただけます。

（https://www.nhk.or.jp/ncon/f-chat/2020_kikaku/post/kyoto.html#005
https://www.youtube.com/watch?v=DhhBCx3y8rU
2021年2月3日最終閲覧）

同志社ナウ

新型コロナ感染症禍でのクラブ活動

― 同志社香里高校ラグビー部の活躍 ―

香里中学校・高等学校教諭　清鶴敏也（きよつるとしや）・藤原涼（ふじわらりょう）

16度目の決勝戦、花園への挑戦

本校ラグビー部は、第100回全国大会大阪府予選決勝戦へ進出し、善戦虚しく常翔学園に47対7で敗戦しました。16度目の全国大会への挑戦でしたが、地力の差で全国大会出場を得ることは叶いませんでした。さて、誰しも予想ができなかったコロナ禍での、クラブ活動を振り返ってみます。

まさかの臨時休校

3月4日の教員会議で、3月6日から20日までの臨時休校が決定し、その後数度にわたり延長され、結果的には5月31日まで続いてしまうことになりました。この間のクラブ活動は一切できず、3月末までは、こちらからのアクションは起こさず沈黙のときが過ぎました。動き出したのは4月、キャプテン、副キャプテンの3名からの部員に対しての、体調管理や休校の長期化での不安などの聞き取りを指示し、部員間でのつながりを持つことにしました。5月になり、OB・トレーナーの協力を得て、オンライン「ZOOM」を使って、週2回、2時間の自宅での自重トレーニングを企画し、試行錯誤のなか、何とかラグビーにかかわる時間の確保に奮闘しました。

ようやくの学校再開

6月1日、学校が再開されましたが、クラブ活動再開は、2週間後の6月15日からで、多様な規制（図表）の中での活動にとどまり、通常の活動になったのは7月20日以後になりました。約5か月間のブランクは予想以上に、選手の身体能力を奪うこととなり、唖然としました。9月に入り、練習試合を最小限の3ゲームとしてチーム力の向上を図るが、試合ごとに怪我人を出しベストメンバーも組めずに、10月4日の予選1回戦を迎えることになり、苦しいチーム編成の中、決勝戦へと勝ち進んでいくことになりました。

多くの方々に感謝

大会中も、学校内での感染によって、試合を棄権するという最悪の状況を見据えながら、見えない敵コロナウイルスとの戦いでもありました。夏の高校インターハイが中止された状況で、全国大会予選が実施され、花園への挑戦ができたことに、学校関係者、高体連、協会等、多くの方々に深く感謝いたします。

具体的な活動計画（各部）

期間	ステップ1	ステップ2	ステップ3
	6月15日(月)～21日(日)	6月22日(月)～28日(日)	6月29日(月)～7月5日(日)
形態	準備 体力づくり	体力向上 個人練習	グループ練習 （5～6名程度）
範囲	校内のみで実施	校内のみで実施	校内のみで実施
時間 日数	1時間程度 平日のみ	2時間程度 日曜日2時間程度	平日2時間程度 日曜日2時間程度
休養日	平日1日と 日曜日の2日間	週2日	週2日
備考	顧問付き添い・ 下校18時	顧問付き添い・ 下校18時	顧問が活動状況を把握・確認 外部コーチ指導可・下校18時

期間	ステップ4	ステップ5	ステップ6
	7月6日(月)～7月12日(日)	7月13日(月)～19日(日)	7月20日(月)以降
形態	全体練習 （部員全員での練習）	全体練習 （部員全員での練習）	従来通り
範囲	校内のみで実施	校内外で実施	
時間 日数	平日2時間程度 日曜日2時間程度	平日2時間程度 日曜日2～4時間程度	
休養日	週2日	週1～2日	
備考	顧問が活動状況を把握・確認下校従来通り・7月12日(日)～対外試合	下校従来通り	

決勝戦前半終了、後半へ

同志社ナウ

コロナ禍における保健室運営

女子中学校・高等学校　養護教諭　田中舞（たなかまい）

長い休校を経て、本校では6月から分散登校を始め、段階的に学校を再開することとなりました。生徒たちへは、学校生活を安全に送る上での注意点を指導し、多くの制限をもうけた中での学校再開となりました。

学校再開にあたり文部科学省からガイドラインが出され、その中に「毎朝登校前に健康観察をし、発熱などの風邪症状があれば登校を控えさせる。生徒が健康観察をせずに登校した場合は、教室に入る前に教職員が健康観察を行うこと。」というものがありました。本校では「登校前に家庭で健康観察表を記入し登校。出欠点検時に、各担任が健康観察表を点検する。」という方法をとることとなりました。学校再開からしばらくの間は、各校舎前に検温場所を設け、健康観察をせず登校した生徒には教職員が非接触型体温計を用いて一人ひとり検温し、問題ないことを確認した上で教室へ入れるといった対策もあわせて行いました。これはほんの一例ですが、他にも校内の消毒や換気等、ガイドラインに基づいた様々な対策を講じています。

保健室には、学校生活の様々な変化による不安と緊張感の中で心身ともに疲弊し、さまざまな不調を抱える生徒が多く来室しました。今こそ心のケアのための保健室利用が必要な状況であるにもかかわらず、その一方で、感染の疑われる症状のある生徒への対応も慎重に行う必要があり、保健室での対応には大変苦慮するものがありました。対応する養護教諭自身が感染源にならないよう細心の注意を払いつつ、来室生徒へは玄関で問診・検温をし、有症状者は個室に隔離するなど、学校医の助言のもと、安全な環境づくりに努めています。まだまだ感染拡大は続いており、不安な状況が続きますが、引き続き安全な学校生活のために力を尽くしたいと思います。

校舎前の検温場所の様子

同志社クローズ・アップ

コロナ禍における祈祷会

法人部法人事務室

同志社の「祈祷会」の成り立ちはどのようなものであったのでしょうか。一説によると、同志社の寮生たちが中心となって、創立記念日（11月29日）や創立者新島襄永眠の日（1月23日）に、墓前で夜明け前に祈祷会が行われるようになったのは、明治30年前後からで、第2次大戦後は学校の行事として引き継がれたとされています（河野仁昭『キャンパスの年輪―同志社今出川校地―』同志社大学出版部　1985年12月）。

この祈祷会は現在まで脈々と引き継がれ、同志社の志を受け継いだ人、同志社の教育に情熱を注いだ人、そしてそれらの人々が愛した家族が眠る同志社墓地（若王子山頂）において執り行われ、同志社に連なる人々が新島の言葉や想いに改めて触れる静かな心の拠り所となっています。

同志社創立記念日祈祷会

2020年1月、日本でも感染者が確認された新型コロナウイルスの感染拡大は、そうした同志社に連なる人々のささやかな営みをも揺るがす脅威となりました。法人内各学校では休校を余儀なくされました。また、大学・女子大学では学生がキャンパスに入構することもかなわない時期もありました。こうした逆境の下、同志社は新島の掲げた「人一人は大切ナリ」という言葉を覚え、社員が知恵を出し合い、志をひとつにし、学生等への遠隔授業環境の整備、経済支援等に取り組んできました。しかしながら、2021年2月現在（執筆時）も感染収束の目途はたっておらず、私たちの活動は未だ厳しい制約の中にあります。

そのような中で迎えた2020年11月29日（日）の同志社創立記念日祈祷会は、ソーシャルディスタンスに配慮し、午前9時から、栄光館ファウラーチャペルに於いて執り行われました。墓前祈祷会の変更は新型コロナウイルス感染症拡大防止に配慮した苦渋の選択で、かつ、人数制限を設けての開催となったため、165名（内オンライン参加者88名）の園児・児童・生徒・

学生・教職員・卒業生・保護者等の参加となり、例年より規模を縮小して執り行われました。

祈祷会は、オルガニスト高橋聖子大学嘱託講師の導きによって開式され、国際中学校・高等学校聖歌隊の讃美（合唱による感染に配慮して事前録音）、国際中学校・高等学校朴元婀怜牧師の司式による聖書朗読・祈祷ののち、国際中学校・高等学校聖歌隊の合唱（事前録音）による庭上の一寒梅がチャペルに響きました。次に、「子ろばに乗って」と題して国際中学校・高等学校山本真司牧師が語りかけました。引き続き、八田英二総長・理事長、植木朝子大学長、飯田毅女子大学長が出席者を代表して祈祷を捧げ、山本真司牧師の祝祷、後奏をもって祈祷会を終えました。祈りのうちに創立期を想起し、新島が同志社を創立した想いを、受け継いでいくことを、参加者一同胸に刻む祈祷会となりました。

２０２１年1月13日、政府は新型コロナウイルスの感染が拡大する大阪、京都、兵庫の関西3府県を含む7府県に対して特別措置法に基づく緊急事態宣言を発出し、創立者永眠の日祈祷会の準備を進めていた私たちにも激震が走りました。同宣言を踏まえ、参列者の健康を最優先し、創立者永眠の日祈祷会を、1月23日（土）午前9時から、栄光館ファウラーチャペルに於いて規模を縮小し、関係者のみで執り行うことといたしました。

祈祷会は、黙祷の後、大学キリスト教文化センターオルガニスト加藤真子氏の導きによって開式されました。讃美歌はチャペルに於いては各自心の中で唱和しました。次に、国際学院初等部・国際部チャプレン石川眞弓牧師の司式による祈祷・聖書朗読の後、加藤真子氏のオルガン演奏による庭上の一寒梅がチャペルに響きました。そして、「引き継ぐということ」と題して小学校宗教科中川好幸教諭が、小学校のアーモスト・ボストンへの修学旅行での取り組みを通して、新島の志が現代のボストンのオールドサウス教会の方々に届き、心をつないでいることを話されました。志をもつこと、志を引き継いでいくことの大切さ、尊さを知る奨励でした。引き続き、八田英二総長・理事長、植木朝子大学長、飯田毅女子大学長が代表して祈祷を捧げ、黙祷、後奏をもって祈祷会を終えました。ライブ配信の参加者は86名であり、オンラインを通じて心を一つにする試みとなりました。

前日には、八田英二総長・理事長が同志社に連なる人々の想いを代表して墓参し、献花をされました。後日、献花に気づき、お声がけいただくことがあり、同志社の精神を継承する人々の新島襄への熱い想いを改めて知ることができました。

今年度はコロナ禍のため異例ずくめの祈祷会となりましたが、皆様のご協力のもと、創立者新島襄の想いを現代に引き継ぎ、まだまだ続くであろう厳しい道を同志として共に歩んでいく祈祷会となりました。

創立者永眠の日祈祷会

同志社クローズ・アップ

第145回同志社ＥＶＥ「Sparkle～あなたと見つける新しいＥＶＥ～」オンラインにて開催

大学今出川校地学生支援課

コロナ渦におけるＥＶＥ実行委員会の発足

２０２０年11月26日（木）～28日（土）にオンラインによる第145回同志社ＥＶＥを開催した。大学への入構が制限され、授業形態も原則ネット配信にて行われている最中の６月に、ＥＶＥ実行委員会は発足した。例年のようなオンキャンパスでの活気溢れる開催は不可能かもしれないが、毎年11月29日の創立記念日を祝う行事である同志社ＥＶＥの歴史を途絶えさせるわけにはいかないとの学生たちの強い思いから、ＥＶＥ実行委員会を発足し、実行委員の募集から各種ミーティング、団体への全体説明会もオンラインで行いながら準備を重ねた。

今年のＥＶＥをオンライン中心に開催することは早期に決定していたが、新型コロナウイルスの感染状況を睨みながら、当日のライブ配信はできないか、小規模なステージであればできるのではないか、ＺＯＯＭでのお笑い芸人企画はどうかと悩みながらも、最終的にはライブでの配信をあきらめ、オンライン配信のみと決定するなど、ＥＶＥ実行委員会の学生たちにとっては難しい決断の連続であった。

オンラインでの配信に際しては、これまでは関わりの少なかったコンプライアンスの問題が浮上した。学生たち自身が著作権、著作隣接権、肖像権などを調べ、レコード会社へ音源の利用許諾を求めたり、JASRACやスタジオジブリに確認を行うなど、試行錯誤しながらではあるが、ＥＶＥの運営に必要なリスクマネジメントの視点から必要な措置を講じていった。

様々なコンテンツの作成

「団体の活動の発露の場」というＥＶＥの理念に基づき、各団体の活動成果の発表が中心となるコンテンツを作成した。「D-Tube」「同志社オンライン美術館」「同志社オンラインステージ」などである。中でも「同志社芸人Ｎｏ・１決定戦２０２０」では、笑いの本場「よしもと祇園花月」にて、二人の芸人にＭＣとして協力いただいた。学生芸人の発表の場として盛り上げていきたいというＥＶＥ実行委員の強い熱意に先方には快く応えていただき、安価で全面的な協力をいただくことができた。また、「教授とザワツク夜」では、３名の先生方にもご出演いただき、ＭＣを務めた喜劇研究会の巧みな話術により、普段のキャンパスでは見られない先生方の一面を引き出し、皆で盛り上げられている。

学生をはじめ、多くの方々が苦しみ、悩みながら過ごしているコロナ禍において、今年度のＥＶＥのテーマである「Sparkle～あなたと見つける新しいＥＶＥ～」には、このような状況だからこそ生み出せる、例年とは異なる新しい形態で同志社大学生の輝きや魅力を、表現したいとの思いがあった。

第145回同志社ＥＶＥの動画は、多くのコンテンツをアーカイブ配信として２０２１年６月まで引き続き公開している。上記以外にも紹介できていないコンテンツもあるので、是非一度公式ＨＰをご覧いただき、学生たちの輝く姿を目の当たりにしてもらいたい。

第145回同志社ＥＶＥ実行委員会　公式ＨＰ
https://doshisha-eve.com/

電子パンフ表紙（EVE）

同志社クローズ・アップ

2020オンライン同志社クローバー祭

大学京田辺校地学生支援課

２０２０年度同志社クローバー祭は、新型コロナウイルスの影響により、初のオンライン開催となった。オンライン開催が決定したのは昨年６月のクローバー祭運営委員会。学生実行スタッフは、対面での開催を前提に一昨年の12月から新体制で準備を始めていたが、オンラインでの開催が決定したことにより、この時点で企画の練り直しが必要となった。前年度からの継続スタッフの中には、対面開催ができなくなったことによりモチベーションが下がり、やる気を失った学生も多数いた。

一方で、学生リーダーを中心にオンライン学園祭に向けて、動画編集が得意なスタッフによる講習会を行ったり、外部講師による著作権についての研修を受けたり、生配信するための機材の準備や勉強などを着実に進め、さらに、clusterというバーチャル空間を構築できるアプリを使用して、京田辺キャンパスを再現することにも挑戦した。

当日は、録画と生配信を織り交ぜて配信。オンデマンドや録画に限らず生配信を併用することで、参加者は盛り上がりや臨場感を味わうことができたのではないだろうか。clusterでの京田辺キャンパスの再現度は非常に高く、参加者は自身のアバターでcluster内を歩き回ったり、模擬講義やアスレチックなどのイベントに参加したりすることができた。さらに、遠方の卒業生や知人同士の交流の場としても利用することができ、好評であった。

例年、同日開催している京田辺市民文化祭も、今年度はクローバー祭に合わせてオンラインのコンテンツを多数用意してくださり、また、準備段階から学生スタッフと市民文化祭スタッフを交えてＺｏｏｍでのやり取りを重ねることで、お互いの祭

の準備や当日の様子について理解を深めることができ、例年よりも強い連携を図ることができた。

祭の後に、学生リーダー陣と行った振り返りでは、モチベーションが下がったままの学生と、達成感を得られ満足できた学生に二分された。春学期中は大学への入構が制限され、学生同士のコミュニケーションが取りづらかったことも、モチベーションを保てなかった要因かもしれない。

２０２１年度クローバー祭の形式は未定であるが、いかなる開催形式になったとしても、オンライン学園祭によって得られた知識を生かし、更に新しい祭の形について模索してくれるよう願う。

京田辺市民文化祭に出演

モザイクアート

生放送の様子

本部にて放送の進行をチェックする様子

脱出ゲーム

ラーネッド記念図書館前からの生中継の様子

学食インタビュー

バーチャル京田辺キャンパスcluster

2020オンライン同志社クローバー祭の様子

同志社クローズ・アップ

動物介在教育の実践
～スクールドッグ「スー」の役割～

中学校・高等学校 教諭　青木潤一（あおきじゅんいち）

はじめに

本校に「スクールドッグ（以後はスー）」がやって来て、今年で4年目を迎えた。スクールドッグを導入している学校は全国的にも珍しく、関西圏では同志社中学校ぐらいである。

海外では、本格的にスクールドッグを導入し、生徒たちのストレス軽減や情操教育などにも深く影響を与えているという動物介在教育の実践報告は多々ある。（図1：左の写真）

「なぜ、学校現場に犬?」といった疑問は学校に来客があるたびに投げかけられる言葉ではあるが、スーと触れ合った後に、嫌な顔をして帰っていく人は未だに見たことがない。本校に先立つこと10年も前に立教女学院小学校では独自に犬を学校に連れてくる試みを行っている。導入のきっかけは、児童の一学校に犬がいればいいのに」というとてもシンプルな発言からであった。しかし、結局はこのシンプルな生徒のニーズが今の学校現場には求められていることなのかもしれない。コミュニケーション能力の低下や、それに伴う不登校生徒の増加、先進国の中でも突出した自己肯定感の低さといったように、学校はもはや無条件に生徒が登校し、活躍できる場所ではなくなっている。

図1）教室の中で生徒と一緒に授業を受ける教育犬（スウェーデン）。
出典：【北欧の教育最前線】教育犬やペットのいる教室 教育新聞（https://www.kyobun.co.jp/tag/online/）

図1）銃乱射事件があったフロリダの高校に導入されたセラピー犬。その活躍もあり卒業アルバムに掲載されることになった。
出典：StrawbridgeStudiosInc./AerieYearbook/Twitter

1．「動物介在教育」とは何か

現在、動物を用いたアニマルセラピーとしては犬や馬、時にはイルカなどを活用したものが知られているが、これらは「動物介在療法」と「動物介在活動」の総称である。「動物介在療法」とは言葉の通り、治療の一環としての行為であり、動物の参加が不可欠な治療法のことを指している。

一方、「動物介在活動」は動物による「癒し」が、効果的に対象者に作用されるような活動の総称である。本校では後者の「動物介在活動」のとりわけ教育に特化した、「動物介在教育」を実践している。これらの活動には必要な施設や明確なプログラムが存在していないため、すべての介在活動がその場に即して臨機応変に変容する要素を持つことになる。一見、用途も方向性も不明確な「スクールドッグ」ではあるが、この「不明確さ（曖昧さ）」こそが教育現場にいる我々にとっては好都合なのである。

2．本校での取り組み

①「スーサポーター」で生徒の自主性を養う

生活指導部では2019年度より「スーサポーター」を募集した（図2）。目的は大きく2つあり、1つ目はスーの健康を守るということ。普段の散歩や糞の処理、餌やりなどが生徒の役割になっているが、これはあくまでもサポーターの表面的な仕事である。2つ目の目的として、犬の世話をすることで生徒達の自立の一歩につながるという教育的効果を想定している。定期的にミーティングを行い、どのように世話をするのかを検討している。

②サポートセンターでのスーの活用

本校の生活指導部には、サポートセンターと呼ばれる部屋が併設されている。この部屋は、様々な背景から教室に入りづらかったり、学校に登校しにくかったりする生徒から、ちょっとした気分転換に来室する生徒など、様々な用途で利用されている。それらの生徒のニーズをスーは満たしてくれる。気分が落ち込み、辛い思いをしている生徒にはそっと寄り添ってくれ、気軽に来室した生徒には尻尾を振りながらじゃれ合っている姿を見ると、本能的に生徒の思いを理解しているかのようである。

図2）サポーター募集のポスター：このポスターも生徒の自発的な作品である。

3．「動物介在教育」を通して見えてきたもの

多くの小学校では「いきもの係」などを通して、「命」に対する情操教育が行われている。中学校・高校になるにつれてこれらの傾向はなくなっていくように思う。むしろ今の時代には中高生にこそ、命に触れ合うタイミングが求められている。

さて、本校で実践している「動物介在教育」と小学校などでは定番の「いきもの係」とはどのような違いがあるのか。その点についても触れておきたい。小学校などの「いきもの係」などは「動物飼育活動」と呼ばれ、比較的飼育が容易なウサギやニワトリが好まれる。日常の中で生き物と関わることが情操教育になる一方、不適切な飼育環境などが指摘されるケースも数多く報告されている。状況によっては「命」を軽んじることにもなってしまう。

表1）

	学校での動物飼育活動	学校での動物介在教育 ※従来のケース
主な使用動物	ウサギ・ニワトリ・金魚・昆虫など	犬が中心（馬やヤギなども利用）
メリット	毎日の世話が出来る 動物の生態を知り、生死に関わる 毎日関わり、愛着が形成されやすい 動物を通しての交流が増える 問題解決学習能力の育成が可能	教員側の負担が少ない 動物の福祉が優先される 地域との結びつきが出来る 効果的な教育が提供される 普段の学校にいない動物と交流が出来る
デメリット	教員に負担がかかり、コストが高い 適正な飼育環境の確保が困難 保護者の理解と協力が不可欠	一時的な交流になりがち（従来型） 教育効果が限定的になりがち（従来型） 専門家の協力が不可欠

他方で「動物介在教育」では、人間との関係性の良さから犬が多用されることが多い。近年の研究では1万年以上も昔から、人間と犬とは良きパートナーとして繁栄してきたことが知られている。また人間にとって犬との触れ合いはストレスを軽減させるオキシトシンの分泌を促すことも知られている。表1に「動物飼育活動」と「動物介在教育」の比較をまとめた。

おわりに

これからの学校教育のあり方は「生徒を受け入れ、従来通りの教育を提供する」といったものから、「より生徒に寄り添い、個別最適な学びや対応が取れるか」に大きく方向転換している。同志社を創立した新島襄は先立つこと100年以上も前に、「人一人は大切なり」との言葉を残し、生徒・学生一人ひとりの個性や考えを尊重した教育を目指し実践してきた。

今回紹介した取り組みは、教育システムのほんの一部でしかない。しかし、このシステムが学校で起こす様々な化学変化には、計り知れない可能性が秘められている。

学校に犬 広がるふれあい

生徒の心 癒やし励ます

朝日新聞（2020年12月22日　夕刊）

同志社クローズ・アップ

2020年度コロナ禍での体育祭・文化祭

香里高等学校 3年生自治会会長 石井莉乃（いしいりの）

私は同志社香里で2020年度生徒自治会会長を務めた。2020年は役職を通して記憶に残る出来事が沢山あった。

大阪城ホールでの体育祭

新年度に入り、例年であれば4月に新入生のためのクラブ紹介を行い、5月に体育祭を行っているはずだった。しかしコロナの流行で発令された緊急事態宣言により、4月から5月末まで休校となったため、すべてのスケジュールが変わり、体育祭も9月まで延期となった。9月はまだ暑く、長時間グラウンドにいると熱中症になる危険性もあるため、屋内である大阪城ホールで開催することとなった。

大阪城ホールでの開催は初めてであり、広さや設備などを確認する必要があったため、生徒自治会ではホールスタッフの方と何度も打ち合わせを行った。広いホール内で生徒が迷わないように、移動の際混雑が起きないように全体の動線を考えることに苦労した。そして何よりも感染対策を行うために、普段気を配らないような所まで考える必要があった。

まず人数を減らすため中高を午前午後に分け、座席の配置も間隔を空けて指定し、保護者なしで生徒のみでの開催とした。時間短縮によって例年よりも競技数が少なくなったため、その分充実した内容にしようと策を凝らした。そしてマンネリ化した競技を一新し、競技をしている人も見ている人にも楽しんでもらった。中でも好評だったのが生配信による実況であった。競技場所と待機場所が離れており、かつ座席もソーシャルディスタンスをとっているため盛り上がりにかけてしまう。そのため生徒により楽しんでもらえるように、配信を見ている保護者にその

体育祭・大阪城ホール

場の熱気を伝えられるように、勢いのある実況にすることを心がけた。

また中高3年生がクラス代表の横断幕を作成したことにより、学年を超えて団結力が高まった。そして紫翠会から寄贈して頂いたオリジナルのマスクを全学年で着用した。体育祭閉会式で、そのマスクを付けている生徒たちを見ると、大変なことも多かったが無事に体育祭を開催することができて良かったと思った。

STAYKORI～みんなの心は三密に～

9月の体育祭が終わり、11月の文化祭に向けて学校全体が忙しくなった。本来ならば5月頃から文化祭の準備を始めているが、未定なことも多く、どの学年もテスト期間が被っていて日程も少なかったため、過密なスケジュールとなった。文化祭も生徒のみでの開催となったため、各ステージの生配信を行った。生徒自治会では文化祭担当業務に加え、配信業者・ステージ業者・音響業者・パンフレット印刷業者と何日にも分けて綿密に打ち合わせをしていた。その中でも配信業者との打ち合わせが大変だった。安定した配信を行うために学校の設備を何度も詳しく確認し、慣れない専門的な知識も勉強する必要があった。また学校を回ってクラス・クラブの展示などをリポートすることになっていたため、移動による電波の位置確認に苦労した。

それに加え本校文化祭で盛況する模擬店・中庭ステージ・地下ロックが無くなったことにより、例年から内容も大幅に変更しなければならなかった。例年よりステージが少なくなったことによって一部に観覧者が殺到する恐れがあった。そのため整理券を配り、生配信の映像を教室に流し、人を分散させることで密を避けることができた。

コロナ禍により出来ることが限られている中で、クラス・クラブ・有志団体がそれぞれ工夫して取り組んだ。クラスでは学年別で展示・ムービー・劇に分けてクラスの出し物を行った。クラブではコロナの影響を受けながらも活動したその成果を発表した。有志団体はソーシャルディスタンスを保ちながらもダンス・歌・漫才などを披露した。制限があった中、どれも例年に勝る素晴らしい出来栄えであった。

文化祭・食堂前ステージ

今年度の体育祭・文化祭の開催に導いたのは紛れもなく生徒の力あってのことだと思っている。私はたくさんの生徒と関わることでそのことを実感した。コロナにより多くのことが変わったが、それを受け入れて前に進むという生徒の柔軟さがあったからこそ、型に捉われず、新しい行事の形を試みることが出来た。学校という大人数集まる組織が、同じ方向を向いて進むことは決して容易い事ではない。しかし私たち生徒は、助け合い支え合い、皆で団結して行事を作り上げることが出来た。生徒同士の協力無しでは、決して成し得なかったことだろう。行事を通して、同志社香里という学校の素晴らしさを再確認した。

同志社クローズ・アップ

女子中高とICT　休校中の学びに対して

～学びを止めないために～

女子中学校・高等学校 ICT教育推進委員会 教諭　川嶋有一（かわしまゆういち）

はじめに

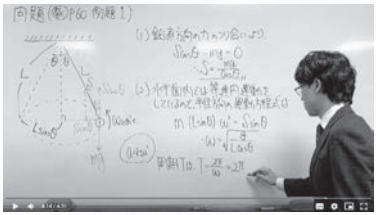
２０２０年３月、本校は全国に出された新型コロナウイルス感染拡大防止のための休校要請に基づき、全校一斉休校を決定した。幸いにも本校では学年末試験を全て終えていたため、年度末までの影響は最小限で済んだ。しかしながらその後、休校措置がいつ解かれるか見当もつかず、４月からの新学期を通常通り迎えることが危ぶまれたため、３月中旬から遠隔授業についての方策の検討を開始し、3月下旬にGoogle社の提供する「G Suite for Education」の利用を決定した。本校が行おうとするオンライン授業の形に合うということに加え、世界的な教育プラットフォームとしての実績もあったため、これに決定した。

本稿では、女子中高が行った休校期間中のオンライン授業について振り返るとともに、教員と生徒に実施したオンライン授業に関する全校アンケートの結果を踏まえ、その評価を行った結果について述べる。

オンライン授業の取り組み

４月の初旬に教員用アカウントを、中旬には生徒用アカウントを配布し、礼拝や健康観察・ＨＲのクラスルームを作り、運用を開始した。４月中はお試し期間のような形で、課題などは出せる教員が出すなどして対応し、５月から本格的にオンライン授業を開始した。

授業の形式としては、オンデマンド型を採用した。基本的な形としては、動画での講義視聴を行った後に課題に取り組んでもらい、それを提出するという形である。課題の代わりにGoogle Formでの確認テストを行うという形式をとる授業もあった。動画の作成については事前の校内研修会で「10分以内。できれば5分程度のものに。」と教員へ周知していたため、そのような長さで作成していた教員が多かったようである。



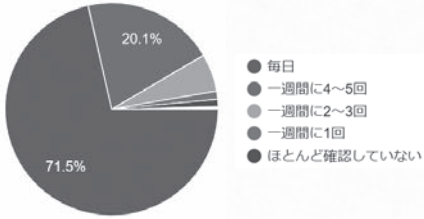
アンケート結果

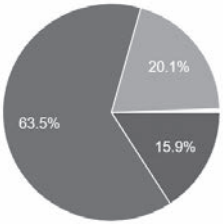
休校明けの6月に、休校期間中の学習に関する全校アンケートを実施した。このアンケートは、生徒の自宅学習を学校がどれだけ支援できたかを評価する目的で実施した。回答率は約99・7％であり、全校生徒ほぼ全員から回答が得られた。

このアンケートから特筆すべき点を挙げると、本校の休校期間中において、生徒の90％以上が平日は「ほぼ毎日」Classroomを確認し、課題に取り組んだと回答し、75％以上の生徒がClassroomを用いた勉強で「内容を理解することができた」と回答した。このことから、生徒の自宅学習をある程度効果的に支援できたのではないかと評価することができる。

しかしながら課題もいくつか見つかった。

一つは生徒の規則正しい生活習慣についてである。「ほとんど規則正しい生活ができなかった」という回答が20％程度あり、学校がないことによって生活リズムが崩れてしまっている生徒が少なからずいた。





また、自由記述においては、「課題の配信がバラバラのタイミングで把握しにくかった」や「双方向でないために取り組みにくい、質問しにくい」という意見も有った。

これらについて、次に休校措置の必要な場合が起きたときには改善していく必要がある。

今回は家庭の通信環境について明らかでない部分があったために、双方向型が叶わず、オンデマンド型となったが、次は少しでも双方向型を取り入れた形で、規則正しく生活し、学習習慣を整えられるような工夫が求められている。具体的には、朝の出欠点検・礼拝や授業の最初や最後において双方向でのやり取りをはさむなど、教員と向き合ってコミュニケーションを取るという仕組みが必要になってくると考えられる。いきなりすべての授業ややり取りを双方向にするのは環境面を考えても現実的ではないが、出来るところからこれらの課題を克服していくことが必要であると考える。

おわりに

今回の休校期間の取り組みを通して、知識伝達（生徒からすればインプットの作業）はオンラインでもある程度可能ということが判明した。このことから、学校に来て単に知識伝達のみを目的とした授業を受けるだけでは、学校に来る意義というものが感じられなくなってしまうと思われる。したがって、これからは学校で何をするのかということが重要になってくる。単なる知識伝達が目的の授業をするだけでなく、周囲とのかかわりや学び舎としてのつながりを重視した授業や学校生活というものがこれから求められていくのではないかと考えられる。

今回の休校を単なる災厄とするのではなく、これからの教育のあり方を考える機会ととらえて、教育について、学校について、再考していきたい。

同志社クローズ・アップ

コロナ禍の中の学校行事

国際中学校・高等学校　本田学（ほんだまなぶ）

1．本校の行事と今年度の状況をまとめると以下のようになります。

4月　部活動紹介（中学・高校）　→中止
6月　球技大会（高校）・遠足（中学）→中止
9月　文化祭　→形態を変更して実施
9月　体育祭（中学・高校）
　→中止（高校体育祭のみ縮小して10月に実施）
10月　体験学習（中学1年・3年）　→日帰りの遠足に変更
10月　ハロウィン（中学・高校）　→中止
11月　生徒会選挙（中学・高校）　→方法を変えて実施
1月　合唱フェスティバル（中学）
　→中止（体育行事に変更の予定）
3月　研修旅行（中学2年、高校2年）
　→方法・目的を検討中

2．各学期について

(1)2019年度　3学期

最初に中止となった行事は、2019年度の3月に予定されていた研修旅行（中学2年生・高校2年生）でした。本校の研修旅行は、中学2年生は長崎、高校2年生は沖縄で平和研修を行うものです。このような意味で、修学旅行ではなく研修旅行としています。

(2)2020年度　1学期

ホールに新入生全員を集めて行われる部活動の紹介は密を避けるため中止としました。4月から緊急事態宣言による休校期間に入ります。そしてオンライン授業の期間を経て、登校可能となったのは6月15日、翌日から中間考査となりましたので、予定されていた球技大会も中止とし、同時に行われる中学の遠足も中止としました。

(3)2学期　文化祭・体育祭

本校の文化祭は、体育祭と同時期に一週間の期間で行われてきましたが、中高とも体育祭を中止し、短縮授業を行いながら午後の時間でクラスごとに映像作品を作成するという活動になりました。必ずマスクを着用すること、どうしても外さなければならないときは距離を取ることを徹底しながら撮影・編集し、この映像を学年ごとに鑑賞するというのが今年度の文化祭のイベントとなりました。もちろん、密を避けるために鑑賞中も間隔を空けて着席し、学年ごとの開催としました。例年は外部からの来客も多数あり、父母の会はバザーを行い、卒業生も多数帰って来る学校最大のイベントでしたが、本年度は来客をなくし、部活動によ

る舞台発表（コーラス部・ダンス部・演劇部・吹奏楽部）も中止としました。

(4)秋以降

10月に入って、体育祭の代替え行事として、消毒や競技をしていない時間のマスク着用の徹底など、注意深く高校体育大会を行いました。種目は他者との接触が禁じられているゴールドッジというフリスビーをゴールに投げ込む競技で、怪我のリスクも少ない競技です。同日に中学生は、全員がバスに乗ることを避け、現地集合として遠足を行っています。ハロウィンに関しては、着替えをする場所が密になること、写真の撮影で密になることを考えて、時期を変えた上で別の行事を検討しています。少なくとも着替えが必要となるような仮装はせず、食べ物をシェアすることになる危険性を考えて〝Trick or Treat〟も禁止です。生徒会選挙も、中学生の演説は女子大学の新島記念講堂で間隔を空けて着席の上で行いましたが、高校生は人数が多いため一カ所に全員を集めて演説会を行うことはできません。しかし放送では顔が見えないという意見があり、事前に〝政見放送〟を録画してGoogleClassroomにアップし、演説は校内放送で行いました。

(5)3学期

中学校において合唱フェスティバルが予定されていますが、中止の方向です。2学期にできなかった体育祭の代わりに、この時期に中学生の体育的行事を検討していますが、寒い時期でもあり、外部の体育館を借りて行うことを検討しております。体育館の大きさや移動時間を考えると、大幅な縮小は避けられないと思います。3学期には研修旅行があります。昨年度は中止しており、今年度も方策を検討しました。しかし、観光バスやホテルでの宿泊など、避けがたいリスクはあると思われ、例年通り行うことは難しいと思われます。

(6)入試

帰国生徒入試を海外でも行っており、今年もロンドン・ニューヨーク・ロサンゼルス・シンガポールでの入試を予定していましたが、今年度の入試は京都のみとしました。海外在住の生徒についてはオンライン面接などの方策を考えています。

3．部活動

様々な制約の中で活動しています。特に音楽系の部活動は、歌うことや楽器を演奏することによるエアロゾルが問題となり、演奏会が次々と中止となりました。部活動は各競技団体によるガイドラインに沿って行われていますが、現在は特に運動部における制約は解除されていく方向にあり、マスクなしに通常の競技が行われている種目が多いようです。マスクをして、他人との距離を確保せよという普段の学校生活との間に乖離が生まれているような気がします。

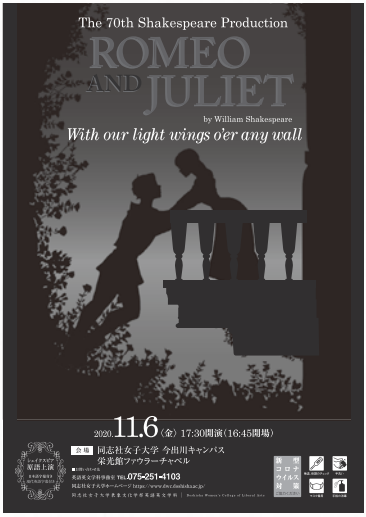
4．次年度以降の学校行事

部活動を中心に制限は解除されつつあります。しかし社会を見ると感染状況は拡大しており、終息は見通せない状況です。昨日は一日の感染者数が最大を記録しました。東京では500人を超え、警戒レベルを4段階のうち最も高い「感染が拡大している」に引き上げました。海外からの帰国生徒を多く抱え、学寮も併設する本校においては、特に慎重に判断しなければならないと考えます。

develop it, but not so much that you can't let it go. You have to love the whole thing more than yourself. The happy end that everyone wants depends completely on such a selfless passion.

This year, for the 70th Shakespeare Production, we staged *Romeo and Juliet*. When teaching the Juniors, I stressed the images of light and darkness that fill the play: candles, sunrise, moonlight and stars against the dark sky, snow on a raven's back, pearls against dark skin - the brightness of love illuminating the darkness. Sometimes the light and darkness are mixed, as when Friar Laurence describes the dawn sun as "*Chequering the eastern clouds with streaks of light*". The play itself too is highly chequered in tone: it has several comedic moments, including some very vulgar humour, which contrast the poetic and tragic aspects, creating a broader view of love and life than just the romantic. I told the students I hoped the audience would feel such contrasting images and atmospheres in our own production the following year. Little did I know then the gathering darkness we would face in 2020.

Usually, April is a busy time of casting and planning for the year. Instead, the campus was declared closed to students for the entire spring semester. Unsure when we could next meet, and with live events cancelled across the country, it looked like our *Romeo and Juliet* would end in tragedy off-stage. Unsure of what to do, I turned to the students. Their response was extraordinary: a wave of passionate determination never to give in and to find a way to do something no matter how difficult. Some of them had joined our department to do this! Then our first piece of luck came: we could meet on campus for casting in July. Then the second: as long as infections did not break out, we could meet over the summer. Our luck held, and the students worked through the vacation with a love and devotion fitting to the play; then into the new semester, five days a week, relentlessly refining every aspect of the production. For the performance, audiences were reduced, but, instead, a crew of technicians filmed the production and broadcast it simultaneously on the internet to an audience of over 300, who sent in ecstatic mails of thanks and support. Like Romeo leaping the walls of Juliet's house on "love's light wings", my students had flown over every obstacle to bring a live audience their great labour of love. It was a triumph of optimism, courage and passion. A triumph of life.



同志社
クローズ・
アップ

Love's Labours Gained

"For stony limits cannot hold love out And what love can do that dares love attempt"

Romeo and Juliet 2:2 l.67-8

女子大学 表象文化学部 英語英文学科
Timothy L. MEDLOCK

As director of any Shakespeare Production, from the moment you pick the next play to the moment the curtain comes down, you live with it for two years. Or rather, it lives with you; it haunts your imagination, perplexes you, steals into your brain at night like the wicked fairy Queen Mab and fills it with dreams of glittering success, a stage brimming with vitality, audiences in tears of laughter or sadness, and students glowing with achievement. But how to get there? Teaching and directing plays of such complexity is no easy thing, but the plays endure for good reason and not just for their complexity. They must have some immediate appeal that grabs you right here, right now. They do. Life. So, teaching the Juniors and directing the Seniors is a relentless search for life: discovering the life in the words - their sound and rhythm, their imagery – and the emotional life of the characters saying those words. Find the life in it. Find the life in you. Bring them together. Now it lives through you.

When students first read the play aloud, their understanding is thin, and so their voices are rather heavy and flat. However, as they work on it, gradually life creeps in; the words lighten in pitch and rhythm, faces flicker, and tentative gestures emerge, as they try, in Hamlet's words, to "suit the action to the word, the word to the action". Initially, they look a bit stiff, but the more they connect to the vital intention of the characters, the more natural they become. Acting the text motivates them, forces them, to discover meaning in the words and feel the beating hearts behind the words. In both Junior and Senior years, there are always those magical moments when an individual or pair suddenly comes alive, and people watching gasp or laugh involuntarily at the miracle. They see no longer fellow students but the play's characters before them and feel the electricity of their emotion. The text has come to life. The whole room lights up.

Yet, for the Seniors, who must stage the play, the joy of creation and the pleasure of collaboration are often mixed with other feelings of frustration and difficulty. To arrive at one final good idea usually means rejecting ten poorer ones, and every creative section of the production – costumes and make-up, props, set and lights, subtitles, sound and music, committee, cast, and assistant directors – has to go through a difficult process of trial and error, adaptation and adjustment. Sometimes whole costumes, so good on paper, have to be discarded. But compromise is part of theatre. You need enough ego to propose an idea and

成文堂
6,000円（税抜）
刊行年月 2020年10月1日

新版 交通犯罪対策の研究

川本哲郎（かわもとてつろう）（元大学法学部教授）著

本書は、著者の40年以上に亘る交通犯罪研究を一書に纏めたものである。研究を開始したときは、過失犯罪者の処遇に関心を持っていたが、過失犯罪者の大半は交通犯罪者であるから、修士論文のテーマは「交通犯罪者の処遇」となった。その後、1996年にイギリスのケンブリッジ大学犯罪学研究所で在外研究に従事した折に、イギリスとの比較に興味を抱いて、研究を再開した。1997年に帰国して論文を書いたところ、危険運転致死傷罪の新設が検討されるようになり、2001年に参議院で法案審議の際の参考人として意見を述べることになった。2000年頃からは交通犯罪被害者の研究にも取り組むようになったが、それと同時に、危険運転の中心である飲酒運転を取り上げた論文を発表した。さらに、危険運転致死傷罪の適用を批判的に検討した論稿を執筆した直後の2013年に自動車運転死傷行為処罰法が制定された。そして、それからは、認知症や、あおり運転などのテーマにも取り組んでいる。それらの研究を一書に纏めたものが本書である。

本書の特徴は、交通犯罪について、飲酒運転（アルコール使用障害）や認知症、あおり運転などの運転者の適性の問題に取り組んでいることと、交通犯罪被害者の問題にも視野を広げていることである。

交通犯罪に関する研究が増えてきたのは最近のことであり、専門に研究してきた者が少ないところから、マスコミの取材も多く、百を超えるインタビューに応じてきた。そこで学んだことも本書には反映されていると思う。少しでも多くの方に関心を持っていただければ幸いである。

著者より

晃洋書房
2,900円（税抜）
判型 A5　頁数 258頁
ISBN 978-4-7710-3385-6

カルチャー・ミックスIII 「文化交換」の美学的展開編

清瀬みさを（きよせ）（文学部教授）編著

本書は、異なる時空にある文化が出会うときにどのような芸術現象が生じるか、という問題を「文化交換」というキーワードで考究する試みです。美学、芸術学、美術史、音楽学等を専門分野とする学内外の執筆者12名が、同志社大学人文科学研究所部門研究会第十九期（二〇一六～二〇一八年度）第十六研究に集い、分野横断的な研究活動をともにした成果です。タイトルの「III」、サブタイトルの「美学的展開編」とは、本研究会が同志社大学から出版助成を受け同志社大学人文学研究所叢書として上梓してきた第十七期（二〇一二～二〇一四年度）の『カルチャー・ミックス　文化交換の美学序説』（晃洋書房、二〇一四年三月）、ついで第十八期（二〇一五～二〇一七年度）の『カルチャー・ミックスII「文化交換」の美学応用編』（晃洋書房、二〇一八年三月）に続く「展開編」を意味します。

本書は、既刊の二編とは少々肌合いの異なる、美学理論とそれが適用される文化領域とのかかわり合いを扱う四部構成となっています。第一部「建てる　住まう　橋架ける」においては、美学および美術史的観点から建造物を取り上げ、第二部「つながる美学としてのカルチャー・ミックス　―詩と音楽の時間　光の美学から美術史への射程を広げる―」では、美学、音楽学、美術史的観点から光、詩、時間、空間を、第三部「コミック　リリック　ポリティック」では、美学および芸術学的観点から芸術批評を、第四章「カルチャー・ミックスでの日常生活―張り詰めた部屋の雰囲気　フレームのない美的生活―」では、現代美学から日常生活をそれぞれ取り上げて論じています。

執筆者一同、本書が異なる時空の出会うところに生じた芸術現象について興味をもってくださるきっかけとなることを願ってやみません。

著者より

明石書店
5,800円（税抜）
刊行年月 2020年10月31日

教員の報酬制度と労使関係

労働力取引の日米比較

岩月真也（社会学部助教）著

本書の目的は、日米における公立小中学校の教員の評価に基づく報酬制度の運用のルールを詳細に明らかにし、同時に、その報酬制度の制定のルールについても詳細に明らかにすることによって、日米の決定的な違いは何か、その違いの理由は何かを浮かび上がらせることにある。制度制定のルールを捉えるために、労使関係に焦点を当てている。それゆえ、表題に「労使関係」という言葉が入っている。

本書の構成は、前半で勤評闘争という日本の歴史を概観した上で、人事考課を取り込んだ日本の報酬制度の運用のルールを叙述している。後半では、米国における業績給の複雑なルールを記述し、加えて、その複雑なルールをいかに労使が団体交渉を通じて支えているのかを論じている。終章では日米比較を通じて、両国の決定的な違いとその理由を提示した。一言でその違いを述べるとすれば、米国は集団的な報酬制度であり、日本は個別的な報酬制度と表現できよう。また、制度制定をめぐる労使関係の視点からは、米国は労働力を集団的に取引するのに対して、日本は労働力を集団的に取引しきれておらず、個別的取引に比重がおかれている。

昨今の教員の働き方改革に対する言及は明示的にはなされてはいないが、本書副題にある、日本の教育の世界に馴染みの薄い「労働力取引」の観点から制度を見れば、日本の教員の働きすぎを規定する制度的基盤がきちんと埋め込まれていることが明らかとなる。この基盤をいかに変えていくのか、そもそも変えることができるのか、忌憚のない議論が必要である。

著者より

現代史料出版
2,800円（税抜）

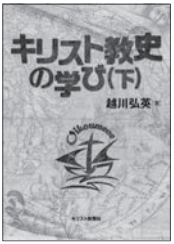
変容する「二世」の越境性

1940年代日米布伯の日系人と教育

吉田亮（社会学部教授）編著

南北アメリカ（ハワイを含む）の日系人史の研究において、第二次大戦時の強制収容や監視を伴う排日体験は極めて重要なテーマのひとつとされている。そのために研究蓄積も多い。その中にあって本書の特徴は以下の4点である。第1に、日系二世のもつ「越境性（Transnationality）」を切り口に戦前、戦中、戦後期における日系市民形成史の質的変化や多様化を明らかにしようとしている点である。ここでいう「越境性」とは、複数国家や地域間を交差するネットワークを形成し、複数文化の習得、複合的アイデンティティの形成や忠誠心・帰属意識の提示に関与し、結果として複数国家や地域に対して実質的な影響力を及ぼす性質・状態を言う。第2に、同時期の日系二世による市民形成ストーリーの多様な場（コンテキスト）に注目したことである。米本土でも「強制収容所」だけでなく、敵性外国人抑留所、再定住都市（シカゴ、ニューヨーク）、ハワイ、ブラジル、日本を扱っている。第3に、日系二世が市民形成をおこなうにあたって影響を及ぼした多様な人間（集団間）関係である。そこには親世代である一世や二世の仲間・友人は勿論、滞米日本人、親日的アングロや人種的マイノリティも含まれる。第4に、特に日系宗教（仏教、新宗教、キリスト教）の市民形成への影響である。宗教が市民アイデンティティに及ぼす影響の大きさを明らかにするためである。本書で描こうとした海外の「多文化社会」にあって「越境性」を一つの資本に生き抜いた日系人のストーリーの諸事例が、「多文化共生」の抱える問題・課題・可能性を考えるひとつの手がかりになることを願っています。

著者より



キリスト新聞社
(上)2,000円(税抜)
(下)2,200円(税抜)

キリスト教史の学び(上下)

越川弘英(キリスト教文化センター教授)著

本書はキリスト教文化センターの提供科目「キリスト教の歴史Ⅰ」(春学期)及び「キリストの歴史Ⅱ」(秋学期)のテキストとして書き下ろしたもので、上巻(3月出版)が古代から中世まで、下巻(9月出版)が近世(宗教改革)から近現代までを扱っています。キリスト教史の入門書として、以下の三点に留意しながら記述しました。第1にキリスト教史全体の流れを分かりやすく概説すると共にその中で生じた重要な事件・出来事について記述すること、第2にキリスト教史における象徴的人物を取り上げ、読者がその生涯や言動を通じて各時代に生きた人々の息吹を感じとれるように試みること、第3に本文中やコラム欄において意識的に多くの文献引用や研究紹介を行い、読者がさらに学びを深めるための便宜をはかることです。筆者自身、かつて同志社大学神学部(大学院)で歴史神学を専攻した者ですが、本書の執筆にあたり改めて最近の研究成果を渉猟する中で多くのことを新たに学びなおし、たとえば中世ヨーロッパのキリスト教の諸相の奥深さなどに新鮮な驚きを感じたことでした。個人的な思い出になりますが、本書を執筆しながら、大学院時代に修士論文の指導やアメリカ留学に際して言い尽くしがたい恩恵をいただいた故・藤代泰三先生のことを何度も想い起こし、またその著書『キリスト教史』(講談社学術文庫)からも様々な教示をいただきました。この場を借りて改めて恩師への感謝を述べさせていただきます。

著者より

キリスト新聞社
1,800円(税抜)

新装増補版 今、礼拝を考える
ドラマ・リタジー・共同体

越川弘英(キリスト教文化センター教授)著

本書は初版が2004年に出版されたもので、2008年までに3刷を重ねました。その内容はキリスト教会(日本のプロテスタント教会)の礼拝の本質や構造、礼拝の中の個々の要素(祈り、賛美歌、説教など)の意味と実践などを、主としてキリスト教の信徒を読者対象としてまとめた入門書的なものです。今回新たに出版された「新装増補版」は旧版の内容を点検して一部を改めるとともに、「増補Ⅰ」及び「増補Ⅱ」として50頁余りを書き加えています。旧版部分が礼拝の基礎的な叙述とすれば、増補したものはより今日的な礼拝についての課題やトピックを取り上げている点が特徴と言えるでしょう。例えば「増補Ⅰ」では「『3・11』後の礼拝を考える」として、東日本大震災の経験を踏まえてキリスト教礼拝の本質を「破局の中で世界と人間の意味を繰り返し『立て直す』こと」として考察しています。また「増補Ⅱ」では2011年に日本のプロテスタント1500教会を対象として実施したアンケート調査に基づいて、現代の教会・牧師・信徒の抱える課題の中から礼拝に関わる部分をとりまとめて分析・検討した「牧師と礼拝のリアルーアンケート調査から見えるもの」という小論、また既存の教会の礼拝の問題や改善点などを提起した「これからの礼拝の話をしよう」という小論を載せています。礼拝という観点からキリスト教について知りたい学びたいという方があれば、ご一読いただければと思います。

著者より

ミネルヴァ書房
2,800円（税抜）
刊行年月 2020年4月20日

教養の会計学

ゲーム理論と実験でデザインする

田口聡志（たぐちさとし）（商学部教授）著

本書は、前著（『実験制度会計論』中央経済社、2015年）の第58回日経・経済図書文化賞受賞後に企画され、原稿執筆がスタートした。本書の目指すところについて、ストレートに言うと「世界でもオンリーワンな会計のテキストを書きたい！」というものだった。

そのような大風呂敷に反し、しかし執筆は思うように進まず、試行錯誤の繰り返しであった。困難多き出版であったが、しかし執筆に長い時間をかけたことで、むしろ色々なことを考えるきっかけができたと、いまは前向きに捉えている。

執筆当初のモチベーションとしては、会計領域以外を専門とする方に、会計の面白さを伝えたいということであった。会計のエッセンスを抽象化すると、実は面白い人間行動が見えてくる。それを他領域の方々と一緒に議論したいという気持ちで執筆をはじめた。

しかしながら、執筆を重ねていくうちに、むしろ、会計に携わっている方々（学生、研究者や実務家など）とともに、会計の多様性を理解することをとおして、会計の本質を一緒に理解したいという気持ちが強くなった。大学院生の頃、私はいつも指導教授に、「君にとって、会計とは一体なんだい？」と問われていた。その当時のことを思い出しつつ、そして、その一見単純そうにみえる（がしかし）難問をいつも頭に巡らせながら、本書を執筆した。今後もこの「会計とは何ぞや」という問いにチャレンジしつつ、研究と教育を続けていきたい。

著者より

萌書房
2,400円（税抜）

ブレグジット×トランプの時代

金融危機と民主主義の溶解

小野塚佳光（おのづかよしみつ）（経済学部教授）著

政治過程を通じて、人びとが社会を変える。ある時代を、支配的な思想や政治経済秩序として理解する。

ベルリンの壁が崩壊したとき、ロンドンからベルリンに自動車を走らせて市民たちと抱き合った学生の話。キューバで革命に失敗したカストロが、歴史に照らして革命の正義を訴えた自己弁論。ヨハネ・パウロ2世が社会主義国家ポーランドを訪れ、野外ミサを行った話。高齢のカストロにオバマ大統領が和解の手を差し伸べ、ローリングストーンズはキューバでロック・コンサートを開いた。

面白い本を書きたい、と思いました。ときに本を伏せて、街を歩きたくなるような。表に出て星空を見上げ、再び読み返したくなるような。そういう本を書きたいと思いました。

東欧諸国が民主化し、ソ連も解体する中で、国境を超えた市場統合が進む。豊かな社会が広まり、民主的な政府間の協力と国際秩序の平和的調整も実現する。そういう時代が来る、という期待を、一握りの超富裕層と金融ビジネスの膨張、グローバルな資本主義は打ち砕いた。

経済学は、一方で、イデオロギー、他方で、市場への介入手段（と自由化）を説く学問です。しかし、市場による解決とは、富と分配の構造を築く〈権力〉そのものではないか。それは貨幣を介して数量化され、物理法則のように分析されても、その時代の権力闘争や戦争の現実と切り離せない。

国民投票において、人びとの不満と怒りはねじ曲がり、政治過程の意味を問うた。

著者より

新潮社
760円（税抜）

歴史の教訓
「失敗の本質」と国家戦略

兼原信克（かねはらのぶかつ）（法学部特別客員教授）著

戦前の日本の過ちが、脆弱な憲法統治体制と統帥権の独立を笠に着た軍の暴走にあったことは明らかである。しかし、私たちが、今、住んでいる自由主義的な国際秩序から戦前の日本を振り返るとき、私たち日本人は、戦後、澎湃と沸き上がった民族自決の運動や、人種差別撤廃への流れを予測できていたであろうか。19世紀的な弱肉強食の世界観を引きずってはいなかったか。

人間を心の底から突き動かす力が、歴史を作る。その力を見抜くことが大切である。それは自由主義的な考え方である。一人ひとりの尊厳の価値は平等である。人は幸せになるために生まれてくる。しかし一人では弱い人間は、言葉と信頼で社会を作る。政治権力は、社会を運営し、人々に奉仕するための道具である。この当たり前の考え方が、もっとも強い力を与えてくれる。そして大きな伝播力がある。

肌の色、宗教、民族、人種によって差別されない自由主義的な国際秩序、資源が無くても勤勉に働いて生きていける自由貿易体制は、日本人が、憧れた国際秩序である。戦後、日本人は、自分たちが夢見た国際秩序が立ちあがるのを見て驚愕した。私たちは、何を見損ねたのか。今の自由主義的な考え方は、どのようにして地球的規模で広がったのか。

本書はこのような問題意識をもって描いた、近代日本の失敗と蹉跌、そして、成功と栄光である。日本は決して恥ずかしい国ではない。是非、これから日本を担う令和の若者に読んでほしいと思う。

著者より

法律文化社
4,000円（税抜）

独居高齢者のセルフ・ネグレクト研究
当事者の語り

鄭熙聖（チョン ヒソン）（社会学研究科 外国人留学生助手）著

セルフ・ネグレクト（Self-Neglect）という言葉をご存知でしょうか。セルフ・ネグレクトは自分自身の健康と安全を自ら放任・放置する行為であり、福祉・介護・保健等の社会サービスや治療の拒否・放棄のみならず、場合によっては責任を果たせない「多頭飼育」や不用品の収集から「ゴミ屋敷」のような状態に至る場合もあります。なお、社会からのアプローチが簡単には届きにくい孤立や疎外の問題でもあり、その状態が続くと孤立死に至るリスクが極めて高いとされています。このようなセルフ・ネグレクト事例は専門職の間で介入困難・支援困難な事例として認識される傾向があります。なぜ、高齢者のセルフ・ネグレクトが困難事例として扱われているだろうか。なぜ、多くの高齢者が、セルフ・ネグレクト状態に陥ってしまったのだろうか。困難事例に至る前に介入できる糸口はないだろうか。その手がかりを見つけ出すには、まず、高齢者がなぜセルフ・ネグレクトに至ったのか、そのメカニズムを解明することから始まると考えられます。これらの問いに答えるべく、著書では、これまで看過されてきた〝当事者の視点と語り〟に着目し、セルフ・ネグレクト状態にある高齢者本人に直接インタビュー調査を実施しました。高齢者がセルフ・ネグレクト状態に至ったプロセス及び当事者が抱えている支援ニーズの解明に迫り、そこにはどのような思いと経緯が、そして社会との関連性があるかを紹介しています。

著者より

岩波書店
900円（税抜）

イスラームからヨーロッパをみる

社会の深層で何が起きているのか

内藤正典（グローバル・スタディーズ研究科教授）著

この本は、同じ岩波新書で2004年に刊行した『ヨーロッパとイスラーム、共生は可能か』の続編として構想したのだが、過去十年、あまりに両者の関係は悪化し、共生は事実上、破綻に追い込まれた。そして今年、パンデミックのさなかにも、各地で「分断」が深まっている。フランスではマクロン大統領がイスラームを敵視するかのような発言を繰り返し、預言者ムハンマドの冒涜も表現の自由だとして、世界のムスリムから激しい反発を受けた。ヨーロッパは、キリスト教徒の大地でもないし、信仰から離れた世俗主義者の大地でもない。そこには多くのムスリムが暮らしている。フランス、ドイツ、英国など西ヨーロッパ諸国は、すでに半世紀以上も前に彼らを労働者として迎え入れたが統合は進まず、むしろ、出て行ってほしいとあからさまに主張する政党が力をもつようになった。

多文化の共生、スローガンとしては誰も反対しないこの言葉が、日々の生活のなかでは、なぜ実現困難で、異文化の排除へと人を突き動かすのか。2015年のヨーロッパ難民危機以来、この動きはますます激しくなった。だが、ヨーロッパ諸国の多くの市民は、中東やアフリカで、なぜ国家の秩序が破綻し、多くの難民や移民がヨーロッパを目指したのかを知らない。私は、同時代を生きる市井の人びとの声を聴きながら問題の構造を解き明かそうとしてきた。本書は、翻弄されてきたムスリムの声から、ヨーロッパとは何であったのかを捉え直す試みである。

著者より

筑摩書房
780円（税抜）

「超」働き方改革

四次元の「分ける」戦略

太田肇（政策学部教授）著

日本企業の強みは「ひっつく」ところにあったといっても過言ではない。仕事は主に課や係といった集団単位で行われ、オフィスでは上司と部下、同僚どうしが顔をつきあわせて働く。それが一体感やチームワークにつながると考えられてきた。また製造現場では「すりあわせ」という作業プロセスが高品質な製品づくりに寄与しているといわれた。

ところがコロナ禍で「ひっつく」ことの弱点が露呈された。オフィスには仕切りが設けられ、テレワークは人と人とを物理的に遠ざけた。そうなると仕事そのものを一人ひとりに分けなければシステムが機能しなくなる。

ひっつきすぎることの問題点は、コロナ禍以前から見過ごされてきたといってよい。長時間労働、ストレスやパワハラ、それに欧米などと比べて低い仕事意欲、イノベーションや起業の低調さ。その背景には、ひっつきすぎる日本の職場環境があると考えられる。工業社会からポスト工業社会へ移行するにつれ、日本の強みより弱みが重みを増してきたのだ。

したがって、いま日本企業、日本社会に求められているのは、人びとの連帯やチームワークを損なわずに組織や集団から個人を「分ける」ことである。本書では仕事、職場、キャリア、認知という四つの次元で「分ける」とどんな効果が得られるか、具体的にどのような方法があるのか、各種データや国内外の事例を盛り込みながら解説している。

著者より

PHPエディターズ・グループ
1,500円（税抜）

不思議の国のロンドン

臼井雅美（文学部教授）著

ロンドンとの付き合いが三十年以上にわたる私にとって、ロンドンは愛すべき街であり、その変遷に常に驚かされる街でもある。本著は、在外研究で一年イギリスに滞在する間に、ロンドンの街を改めて見つめ直した結果、完成した。

英文学・英語圏文学を専門とする私に、ロンドンは刺激を与えてくれるだけでなく、様々な可能性へと導いてくれる。その限られた空間の中には、大英図書館でのリサーチやセミナー、ロンドン大学での学会やブリティッシュ・アカデミーでの研究会、サウスバンク・センターでの詩の朗読会、紳士クラブであるオリエンタル・クラブでの集まりへの参加や、フリンジ（小劇場）での演劇鑑賞、ビーガン・カフェで詩人へのインタビューなど、するべきことが無限にあった。文学のリサーチをしながら、街のあちらこちらにも出かけるのであるが、ある地域、ストリート、マーケット、家屋、公園、図書館などの歴史的バックグラウンドやそこで語り伝えられてきたストーリーを知ることになる。そして、それらのストーリーから新たな発見があり、それを今世紀の新たな視点で語ることで、グローバル都市であるロンドンの多面的な顔を垣間見ることができたのだった。

経済格差、難民問題、ブレグジット、コロナ禍、そしてBLMで揺れるイギリスで、ロンドンは、今後も、様々な難題を抱えていくことだろう。ロンドンは何度も危機を乗り越えて再生してきた。不思議の国のロンドンの物語は、まだ続くのである。

著者より

平凡社
820円（税抜）

「共に生きる」ための経済学

浜矩子（ビジネス研究科教授）著

共生と共存は違う。本書の執筆過程を通じてつくづくそう痛感した。いくら多くの多様な人々が共存していても、彼らが共に生きているとは限らない。例え、そこに共に存在していても、それらの人々が背中を向け合っていれば、そこに共生はない。互いに垣根を隔ててにらみ合っている共存者たちの間に、共生はない。

つながることと、共に生きることもまた、違う。つながり過ぎているから、共に生きられない。そのような場面があり得るということにも気がついた。ITプラットフォームを通じてつながっている人々の間に、どれだけの連帯があるか。出会いがあるか。支え合いがあるか。SNSでつながり過ぎていることが、つながりの中から落ちこぼれることへの恐怖をあおり、人々の魂の閉塞をもたらす。そんなつながりの中に、真の共生はない。

共に生きるとは、すなわち手を差し伸べ合うことだ。耳を傾け合うことだ。お互いに相手のために涙できる目をもつことだ。これらのことを、本書を書き進む中で改めて確認した。

このことを踏まえて、真の共生力を持つ人々の人物像をプロファイリングしてみた。その結果、真の共生者には四つの特性が備わっている必要があるという確信に達した。それらは、「対岸の火事を決して無視しない隣人愛」、「横暴な権力には容易に屈しない反骨魂」、「連帯を呼びかけることを躊躇しない仲間意識」、「弱きを助け強きをくじく義賊的気概」である。彼らを探し出したい。

著者より

同成社
1,700円（税抜）

入門 埋蔵文化財と考古学

水ノ江和同（文学部教授）著

日本でおこなわれている発掘調査の件数は毎年約8、000件。これは文化財保護法に基づく日本独自のルールによるもので、世界的にみても突出して多い件数である。

発掘調査を直接におこなっているのは、その大部分が地方公共団体や法人調査組織に所属する約5、600人の埋蔵文化財専門職員である。彼らの多くは、大学で考古学や歴史学を学び、埋蔵文化財保護に関する専門的な試験を受けて採用される。つまり、大学で学んだ考古学の知識や技術を活かしてこの職業を選択するのである。

ところが、その学生たちが埋蔵文化財保護に関する行政の仕組みや具体的な業務内容を学ぼうとしても、それを網羅的に説明した入門書は意外と見当たらない。そこで本書の最大の目的は、埋蔵文化財保護について興味のある学生にその内容をわかりやすく説明し、それが魅力ある世界であることを正しく伝えることにある。

そしてもう一つの目的は、実際に埋蔵文化財保護に携わる現役の若手専門職員に対し、半世紀余りに及ぶ埋蔵文化財保護の歴史のなかで、その細分化と多様化の進行により複雑になった仕組みの理解を助けることにある。

福岡県教育委員会に12年、九州国立博物館に6年、文化庁に12年、合計で30年に及ぶ公務員経験を活かすべく、そして図や写真やコラムを駆使して本書をまとめてみた。

著者より

KADOKAWA／角川選書
1,500円（税抜）

暮らしの古典歳時記

吉海直人（女子大表象文化学部特任教授）著

本書は前著『古典歳時記』（角川選書）の続編として刊行されたものである。前著は日本古典文化の案内書として、歳時記風に四季折々の言葉の語源と意味を解き明かしたものである。加えて京都文化についても、役に立ちそうなテーマを選んで紹介した。

その前著が好評だったこと、そしてまだ紹介していないテーマがたくさん残っていたこともあって、続編として出版させていただいた。もちろん古典歳時記の充実には力を注いでいるが前著にはない新たな試みとして、第二章「記念日あれこれ」や第四章「生活の中の古典文学」を加えてみた。「記念日あれこれ」には「いちご記念日」「カルピスの誕生日」「チキンラーメン誕生秘話」など、現代的な話題を掲載している。また「生活の中の古典文学」には、「おにぎりとおむすびの違い」「卵と玉子の使い分け」「うまいとおいしい」「正露丸の意味」「絆創膏の呼び方」など、目からウロコの知識が目白押しである。

また元号が令和に改まったので、第一章「新・歳時記」には「新しい元号」「新元号『令和』の出典について」を加えた。また子年に因んで「ねずみの基礎知識」も載せている。第三章「花鳥風月を楽しむ」では、「都鳥幻想」「蜘蛛の文学史」など文学的な話題を選んでいる。第五章「京都文化」には「近衛の糸桜」「銀がないのに銀閣寺」など、知っておいてほしい京都の知識を解説している。日本文化を楽しく学んでいただきたい。

著者より

新型コロナウイルス感染症に伴う在学生支援募金についてのお願い

平素から学校法人同志社へのご理解、ご協力を賜り、深く感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、世界中で多くの人々の生活が一変しました。学校法人同志社が設置する学校には、約4万2000名の学生、生徒、児童、園児が在籍していますが、政府の緊急事態宣言を受け、一時はすべての学校が休校等になり、教室で学ぶことができない状況を余儀なくされました。

各学校では、緊急対策本部を立ち上げるなど、地域や卒業生のお力添えのもとで、社員が英知を出し合い、インターネット学習環境の整備など、力を合わせて、学生、生徒、児童、園児に寄り添いながら、教育水準、教育環境の維持・向上のために努力を続けています。

ワクチン開発が進められていますが普及にはまだ時間を要する中、感染予防と経済活動の両立で長期化するWithコロナ社会においては、学費支弁者への影響も大きく、就学をあきらめなければならない在学生が生じています。

そこで本法人としては、同志社教育を受けることを希望し入学した在学生が失意のうちに終わることがないよう、窮地に立たされている在学生に対して、支援金を給付することを決定いたしました。

しかし、これらの取組を学費収入等で賄うことは難しいことから、この度「新型コロナウイルス感染症に伴う在学生支援募金」を開設して、卒業生、教職員のほか、広く社会の各方面からのご寄付を募ることといたしました。

つきましては、本募金事業の趣旨をご理解いただき、何とぞ温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

学校法人 同志社
総長・理事長　八田 英二

寄付金募集要項

【募金目的】長期化する新型コロナウイルスの感染拡大により、学費の支弁に著しい支障の生じた在学生に対し、支援金を給付すること。

【募集期間】2020年6月1日から2026年3月31日まで

【お申込金額】個人 … 一口　1万円（一口未満のご寄付についても有難くお受けいたします）
法人／団体 … 一口　10万円

【学校指定について】

支援を必要とする在学生数（学生、生徒、児童、園児）は、学校によって異なるため、支援対象者は同志社が決定し、同志社在学生修学特別支援金として給付させていただきます。

ただし、ご寄付いただく際に特段のご希望がおありの場合は、寄付金の一部もしくは全額について、特定の学校をご指定いただくことができます（例：全額を同志社国際中高を指定。半分を同志社小学校、残りを同志社に一任。etc.）。なお、この場合に大学を指定された場合は「ALL　DOSHISHA募金　特定寄付奨学金」として、女子大学を指定された場合は「サポーターズ募金“ぶどうの樹”経済的困窮学生に対する奨学金」として在学生に給付させていただきます。

【税制上の優遇】

学校法人同志社は、文部科学省より「税額控除対象法人」および「特定公益増進法人」の認可を受けており、同志社へのご寄付は個人によるご寄付の場合、所得税の「税額控除」または「所得控除」のいずれかを選択いただけます。

さらに、お住まいの地域によっては、住民税の「税額控除」の対象になります。

詳細は、https://bokin.doshisha.ed.jp/tax/index.htmlを参照ください。

【お申込方法】

「学校法人同志社 募金のご案内」からご寄付いただけます。
https://bokin.doshisha.ed.jp/fund/shien.html

クレジットカード、口座振替、ネットバンキング、コンビニ支払い、金融機関窓口からの振込でのお申込みが可能です。

インターネットからのお申込みが困難な場合やご不明な点がある場合は、下記にお問合せください。

お問い合わせ：法人部法人事務室
京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL：075-251-3006　FAX：075-251-4980　E-mail：ji-hojin@mail.doshisha.ac.jp
https://www.doshisha.ed.jp/

ハリス理化学館同志社ギャラリー展示ご案内

ハリス理化学館同志社ギャラリーは、創立者新島襄の志と同志社の歴史等を、資料で紹介する展示施設です。ハリス理化学館は、J.N.ハリスの寄附をもとに1890（明治23）年に竣工し、永らく同志社における理化学教育の拠点となった建物です。現在、国の重要文化財に指定されています。

【新型コロナウイルス感染症拡大予防について】
同志社ギャラリーでは新型コロナウイルス感染症の拡大予防対策を実施しております。来館前に同志社ギャラリーHPにある「新型コロナウイルス感染症予防のためのお願い」をご確認いただき、感染症拡大予防にご協力をいただけますようお願いいたします。
なお、感染拡大の影響で会期が変更することがございます。来館前に同志社ギャラリーHPで開館状況をご確認ください。

【常 設 展】ギャラリー内には６つの常設展示室が設けられています。１階には「新島襄の人と思想」、「同志社のあゆみ」、「世界の中の同志社」、「同志社の今」、２階には「J.N.ハリスと同志社」、「京都の中の同志社」と、部屋ごとにテーマがあり、創立以来の歴史と共に、京都や世界と共に歩んできた同志社の足跡をたどることができます。（２か月に１回程度の展示替え有）

【企 画 展】第22回企画展
タイトル：「「支え合う志」をつないで―障がい学生支援制度発足20周年―」
期　　間：2021年３月19日（金）～５月23日（日）（月曜日・祝日は休館）
場　　所：ハリス理化学館同志社ギャラリー２階企画展示室（今出川キャンパス）
主　　催：同志社大学学生支援センター障がい学生支援室・同志社大学同志社社史資料センター
※障がい学生支援室は2021年４月に再編予定。
協　　力：全国高等教育障害学生支援協議会（AHEAD Japan）、
大学コンソーシアム京都、日本学生支援機構（JASSO）、日本財団、
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）

【入 場 料】無料
【開館時間】10:00～17:00（最終入館16:30まで）
【閉 館 日】日曜日（企画展開催中は開館）、月曜日、祝日、ゴールデンウィーク、夏期休暇中の一定期間、年末年始。
※開館日等を変更する場合があります。お越しになる前にホームページ等でご確認ください。
【場　　所】同志社大学　今出川キャンパス
※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関を利用してお越しください。

入場無料

お問い合わせ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室（日・月・祝日は閉室）
ホームページ：https://harris.doshisha.ac.jp/
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736
E-mail：ji-harjm@mail.doshisha.ac.jp

新島旧邸公開のお知らせ

新島旧邸の敷地には、幕末まで京都大工頭中井家の屋敷があり、明治初年には中井屋敷を堂上華族の高松保実が所有していました。1875（明治８）年11月29日、新島襄は、この高松邸の半分を賃借して仮校舎とし、生徒８名で同志社英学校を開校しました。翌年、英学校は薩摩藩邸跡地の専用校舎に移りますが、その後、新島は高松邸を購入し、自宅を1878（明治11）年に建築しました。これが、現在の新島旧邸です。同志社発祥の地に建つ新島旧邸を、同志社の建学の理念を体感する場として公開します。

【新型コロナウイルス感染症拡大予防について】
新島旧邸では新型コロナウイルス感染症の拡大予防対策を実施しております。来館前に同志社社史資料センター新島旧邸HPにある「新型コロナウイルス感染症予防のためのお願い」をご確認いただき、感染症拡大予防にご協力をいただけますようお願いいたします。
なお、感染拡大の影響で運営を変更することがございます。来館前に同志社社史資料センターHPで開館状況をご確認ください。

【公開期間】①通常公開　2021年4月6日～7月31日、9月2日～11月30日、2022年3月1日～3月31日
毎週　火・木・土曜日（祝日は除く）
②特別公開　4月1日～4月5日（春の特別公開）、7月25日･8月1日（オープンキャンパス）
10月1日～10月5日（秋の特別公開）、11月14日（ホームカミングデー）
11月29日（創立記念日）、2022年3月20日～3月22日（卒業式）
※公開日の詳細はHPをご覧ください。https://archives.doshisha.ac.jp/

【公開時間】10:00～16:00（入館受付は15:30まで）

【見学対象】①通常公開
旧邸周囲から建物内部を見学（建物内部には入場できません）。
②特別公開
旧邸周囲および建物内部（母屋１階と附属屋）に入場できます。
※旧邸建物内に一度に入れる人数は20名程度とします。

【入 場 料】無料

【場　　所】京都市上京区寺町通丸太町上ル松蔭町
※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関を利用してお越しください。

【団体見学申込】10名以上の団体は、予約が必要です。団体予約は、見学日の１週間前までに電話・FAX・E-mailにて下記にお申し込みください（電話受付は10:00～16:30）。

入場無料

お問い合わせ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室（日・月・祝日は閉室）
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736
E-mail：n-kyutei@mail.doshisha.ac.jp

同志社女子教育と体育・スポーツ

３つの正三角形からなる同志社徽章は、知・徳・体の三位一体の教育理念の象徴であると言われています。同志社の女子教育の中でも、心身に健康をもたらすための教育は常に重視されてきました。それは、正課の授業に加えて、スポーツフェスティバルや課外活動など多面的に展開されています。今回の企画展では、本学の体育教育およびスポーツの歩みを振り返り、それが果たしてきた役割を見直していきます。

期　　間：2019年11月22日㈮～2021年7月30日㈮　期間延長！
時　　間：10:00～16:00
閉　室　日：土・日・祝日　および2021年4月30日
（ただし、2021年7月19日は開室しております）
場　　所：同志社女子大学史料センター
（今出川キャンパスジェームズ館１階展示室）
主　　催：同志社女子大学

同志社女学校でのなぎなたの稽古　　同志社社史資料センター提供

お問い合わせ：同志社女子大学史料センター
〒602-0893　京都市上京区今出川通寺町西入
TEL：075-251-4200　FAX：075-251-4201
E-mail：shiryo-i@dwc.doshisha.ac.jp

編集後記

本号の特集は、同志社大学名誉教授田淵和彦先生から、コロナ禍を機に、オリンピックと学生スポーツのあり方についてのお考えを語っていただきました。また、MBSアナウンサーの西村麻子さんの司会で、同志社大学卒業生のオリンピアン3人に、オリンピックでのご経験や学生スポーツの在り方について語っていただきました。

2020年度、まさかの新型コロナウイルス感染症の世界的流行で東京オリンピックが2021年に延期されてしまいました。2月3日現在でも今後の行方は定かではありません。しかし、そんな時だからこそ、もう一度、オリンピック本来の目的を考え直す契機になるとすれば決して無駄ではないと思います。オリンピックとはただ順位やメダルの色を競うのではなく平和を願う祭典であり、言葉は不自由でもスポーツという共通項を通じて絆を育むことができる場の創出。それこそがオリンピックが本来持つ意義です。限られた国や地域の間で行われるのであれば、それはもはやオリンピックではありません。

同志社は伝統的に学業とスポーツの両立を重んじているため、競技レベルが益々高度化・専門化している中、オリンピックに出場することは並大抵ではありません。また、全世界がコロナ禍という未曽有の状況下で生活様式の転換が迫られ、学生アスリートもこれまでとは全く違う条件のもと競技をきわめなければなりません。しかし、同志社に受け継がれる「倜儻不羈」の精神で、一人ひとりが自ら考えて行動し、存分に力を発揮できればこんなにすばらしいことはありません。

同志社に限らずですが、今後は日本のスポーツの在り方をもっと真剣に考えていく必要がありそうです。日本のスポーツは基本的に学校スポーツが主体なので、交流範囲が制限されがちです。ドイツのような国では地域の皆が共有する場所があり、学校や年齢などに関係なく交流し、多様なスポーツができるようです。同志社スポーツも中高大の連携のみならず、地域と一緒に盛り上がっていけるしくみづくりが今後重要になっていくでしょう。

今号も特集記事のみならず、多くの方々から玉稿をいただきました。紙面を借りてお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

（岡本）

●同志社広報委員会小委員会委員

ABC順・○印委員長

大学神学部助教　木谷　佳楠
大学文学部准教授　山田　徹
大学社会学部助教　奥井　遼
大学法学部教授　勝山　教子
大学経済学部教授　久保徳次郎
大学商学部准教授　内野　雅之
○大学政策学部教授　岡本由美子
大学文化情報学部助教　田中　雄
大学理工学部教授　稲葉　稔
大学生命医科学部准教授　貞包浩一郎
大学スポーツ健康科学部准教授　海老根直之
大学心理学部教授　及川　昌典
大学グローバル・コミュニケーション学部助教　REGINE DIETH
大学グローバル地域文化学部准教授　SUSANNA PAVLOSKA
女子大学学芸学部教授　中野　慶理
女子大学現代社会学部教授　大津　正和
女子大学薬学部准教授　松元　加奈
女子大学看護学部専任講師　葉山　有香
女子大学表象文化学部准教授　宮腰　直人
女子大学生活科学部教授　奥田　紫乃
中学校・高等学校事務長　鎌田　伸一
香里中学校・高等学校事務長　内山　一栄
女子中学校・高等学校事務長　磯田　信行
国際中学校・高等学校事務長　貴志　浩行
小学校事務長　齋藤　道子
国際学院事務長　細川　譲
幼稚園教諭　竹中　琴恵
法人事務部長　柳井　望
大学広報部長　朝田　邦裕
法人事務部校友同窓課長　矢田　直人
大学広報部広報課長　今西　覚
女子大学広報部広報室広報課長　渡邉　一郎

※職名は同志社広報委員会小委員会発足時のものです。

●編集協力　アルカダッシュ

●同志社時報の申し込み

・送料（ゆうメール着払い：1冊236円）のみのご負担でご講読いただけます。
・お申し込みは、綴じ込みハガキをご利用ください。
・宛先　〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学広報課

同志社時報　第151号
編集人　岡本由美子
発行人　八田英二
発行　学校法人同志社
同志社大学広報課同志社時報係
電話（075）251－3120
印刷所　株式会社ＩＴＰ
２０２１年４月１日発行

切り取り線

切り取り線

お手数ですが
63円切手を
お貼りください。

6 0 2 - 8 5 8 0

京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学広報課　同志社時報係　行

『同志社時報』新規購読申込書　ご記入日：　　年　　月　　日

（ふりがな） お名前	
ご住所	〒　　－ 電話（　　）　　－
いずれかに○をつけてください。 校友　・　同窓　・　父母　・　一般　・　教職員 （同志社　　学校　　年卒業）	
ご購読希望	ご記入日以降の発行号から＿＿＿＿＿号まで 『同志社時報』は、年に2回（4月、10月）発行しています。 ※未記入の場合は、購読停止のご連絡があるまでお送りします。
送料について	ゆうメール着払い（1冊236円）で送付します。 ※**現金や切手等**での前払いは承っておりませんのでご了承ください。

ご提供いただきます個人情報は『同志社時報』の発送以外の目的には使用いたしません。
また、厳重なデータの管理を条件に発送業務を学外者に委託しています。

	受　付	入　力
事務局使用欄		

切り取り線

同志社教育の目的は、その神学、政治、文学、
科学等に従事するにかかわらず、みな精神、
活力あり、真誠の自由を愛し、もって邦家に尽
すべき人物を養成するを務めべきこと。

新島襄の遺言より

しおり　切り取り線

切り取り線

切り取り線

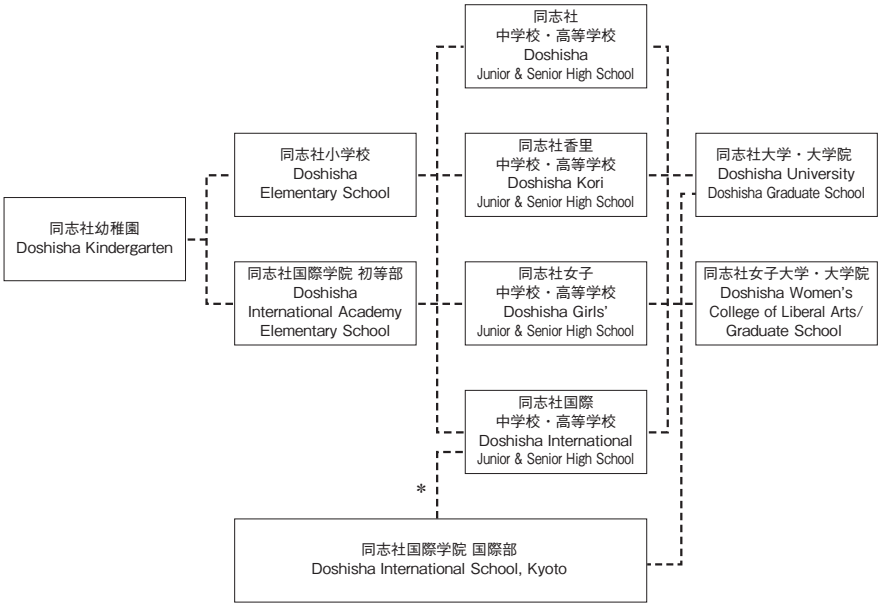
『同志社時報』に関するご意見・ご感想をお寄せください。

Doshisha college song　Words by W. M. Vories　Music by Carl Wilhelm

One purpose, Doshisha, thy name	同志社よ、その名は一つの目的を意味する。
Doth signify; one lofty aim:	その学徒の精神的、肉体的に、
To train thy sons in heart and hand	神のため、祖国のため、生きんという
To live for God and Native Land.	一つの崇高な目的を。
Dear Alma Mater, sons of thine	親愛なる母校よ、同志社の学徒は、
Shall be as branches to the vine;	ぶどうの枝のごとくつながりゆくことであろう。
Tho' through the world	たとえ、世界くまなく、広くはるかに、
we wander far and wide,	われらさまようとも、汝の教訓は、
Still in our hearts thy precepts shall abide!	われわれの心に永遠に生き続けるであろう。

（訳：児玉　実英）

同志社の一貫教育体制
The Integrated Educational System of the Doshisha



＊一定の条件があります（帰国生の要件）

同志社時報 第151号 2021年4月発行

ISSN 0389-3111